

近代における玉虫厨子研究の濫觴（下）

——その三 明治の建築史家による玉虫厨子の研究——

上原 和

一 明治二十三年における黒川眞頼の「法隆寺建築説」と再建論の提起

明治二十一年の九鬼凶書頭を主班とする近畿一円の美術取調の目的とするところは、すでに当時の『官報』、あるいは新聞記事において紹介されてきたように、⁽¹⁾「美術ノ模範歴史ノ参考トナルヘキ物品取調ノタメ」であり、法隆寺の調査の場合も、当然のことながら法隆寺に所蔵されてい

る宝物、すなわち仏像・仏画をはじめとして、彫刻・絵画・工藝に属する諸作品、および文書類が、主たる調査の対象となつたことは言うまでもないのであるが、ここで注目されるのは、加えて建築もまた、その対象として報告されていることである。

すなわち、六月二十一日の『官報』は、五月八日より十三日まで六日間にわたつた法隆寺調査の報告摘要のなかで、法隆寺の古建築について、次のように記している。⁽²⁾
抑々法隆寺ハ推古天皇ノ朝即チ今ヲ距ル大約千二百八

十年前ノ建築ニ係リ、其ノ結構頗ル壯大後世ニ至リ多少修繕ヲ加ヘタル所アルヘシト雖モ毫モ舊觀ヲ失フ所ナキ本邦大建築ノ一ニシテ同寺現存ノ建築中金堂、五重塔、中門、大經藏、鐘樓、綱封藏、食堂、細殿、回廊等ハ推古十五年即チ今ヲ距ル千二百八十二年前ノ建造、其他繪殿、聖靈院、一切經藏、大講堂、三經院、西圓堂、新堂、舍利殿、禮堂、唐門、東寶、西寶等ハ六百年、乃至九百年前ノ建築ナリ、又法輪寺及法起寺ノ三重塔ハ孰モ千二百六十年前ノ建築ニシテ同シク壯觀驚クヘキモノアリ 此他五六百年以降ノ建築アレトモ此等ハ略ス

之ヲ要スルニ以上ニ掲クル諸建築ハ、唯ニ美術上ノ模範タルノミナラス歴史上亦頗ル觀ルヘキモノアリ 而シテ就中参考スヘキモノハ金堂ナリトス 蓋シ同堂ハ獨リ建築ノ宏大壯麗ナルノミナラス其ノ内ニ安置スル所ノ佛像ハ概ネ千有餘年前ノ名作、其壁画ハ傳ニ有名ナル曇徴ノ筆ニ係ルト云ヒ、彫刻 繪畫、建築共ニ美術ノ模範歴史ノ参考タルヘキモノナレハナリ

この『官報』に掲げられた報告で注目されるのは、法隆寺の諸建築をして、彫刻、絵画と同様に、「美術ノ模範歴史ノ参考タルヘキモノ」と目していることである。

今日の美術觀からすれば、建築をして美術の一分野と目するのは当然のことであるが、当時にあつては、建築はかならずしも彫刻や絵画とは同列に扱われてはいない。古社寺の調査においても、建造物の調査は内務省の社寺局の管轄に属しており、主として營繕を目的とした調査であつた。明治十七年に、社寺局は各社寺に命じて、四百年以前に建立された神社・仏閣の建造物について、營繕、建坪、所在、図面、創立、略沿革等を上申させて、『古社寺建物調簿』を作製している。⁽³⁾ また別に社寺局には、『神社及佛寺明細簿』という大冊物の書類があつた。ちなみに、『古社寺建物調簿』⁽⁴⁾ には、法隆寺については、次のような記載が見られる。

法隆寺は推古天皇の十五年に創立落成す 今に至る迄一千二百七十三年を経たり 其後数々修理を加へたり 近例の最著なるは慶長年間徳川家康三ヶ年を経て大修造あり 片桐東市正且元之を領す

一 中門は二階造りにして俗に二王門と云ふ 梁行四間二尺二寸桁行六間五尺 建物御創立の儘 慶長修理の後元祿七年九月五日徳川綱吉修理寄附

一 金堂は瓦葺丹塗梁行七間四尺七寸桁行九間二尺五寸

修理中門と同斷

一 五重寶塔は瓦葺丹塗五間半四方あり 修理前同斷但し綱吉母桂昌院夫人寄附

(後略)

さらに大講堂、綱封藏、西円堂、南大門、東院伽藍と記事は続くのであるが、いずれも當繕記事が主体をなしていることは、中門・金堂・五重塔の場合と同様である。

これまでの内務省社寺局の調査記事に比べると、明治二十一年の美術取調が、古社寺の建築調査の上でも、いかに画期的なものであったか、容易に理解されるのである。さらに注目されるのは、法隆寺の諸建築を宝物の彫刻や絵画と同じように、「美術ノ模範歴史ノ参考トナルヘキモノ」と目しているだけでなく、金堂の場合は、堂内に安置されている仏像や堂内の周囲の壁画と一体的に総合的にこれを評価している点である。

では、明治二十一年の美術取調におけるこうした、建築もまた美術なりとする建築美術観の由来するところは奈辺にあるのか。それは当然のことながら、美術取調の主導的立場にあったフェノロサ・岡倉兩人の美術観に負うものと思われるが、そうした兩人の美術観は、この近畿一円の美

術取調に先立って、明治十九年の十月からおよそ一年間にわたって相共に派遣された欧米美術取調の旅に開眼されるどころ多大であったに相違ない。もとよりヘーゲル美学に馴染んでいたフェノロサであつてみれば、建築をして芸術の一分野と目する点についてはつとに認識があつたとしても、実地にローマをはじめヨーロッパ各地の古建築を見るに及んではである。ちなみに、明治二十一年の美術取調において、文部省側の筆頭であつた専門学務局長の浜尾新は、この欧米美術取調の際の委員長を勤めている。

ところで、すこぶる興味深いことには、明治二十年代に入つて開始された法隆寺建築の研究の嚆矢をなしたのは、ほかならぬこの明治二十一年の美術取調の委員の一人であつた国学者の黒川眞頼の「法隆寺建築説」であり、明治二十三年の六月から八月にかけて『國華』第九、第十、第十一各号に連載された。そのとき黒川は、同年の五月に九鬼隆一を総長に新たに発足した帝國博物館の学芸委員に名を連ねている。黒川の「法隆寺建築説」は、まず左の一行をもつてはじまる。

本邦建築美術ノ中其ノ模範トスヘキモノハ多カレト中二就テ尤モ模範トスヘキハ大和國平群郡ナル法隆寺伽藍

ナリ（傍点筆者）

ここで黒川が、冒頭において、建築美術という言葉を用いていることに、まず注目しておきたいのである。黒川が、この「法隆寺建築説」において主張するところは、当初に示された左の大略にある。

法隆寺ハ舊名斑鳩寺ト云フコトハ誰モ能ク知レルコトニテ其ノ草創ハ推古天皇十五年ナリト云ヘレト是ヲ古史ニ徴スレハ斑鳩寺ト法隆寺トハ建立ノ時異ナリ其ノ建築ノ新古ヲ云ハ、先ツ斑鳩寺ヲ造リテ後ニ法隆寺トハ造ラレタルナリ此ノ建築ノ成リシハ推古天皇ノ十五年ニハアリケル然ルヲ天智天皇ノ御代ニ至リテ斑鳩寺及法隆寺問寺並ニ焼失セシヲ其ノ後再建アリシ時斑鳩寺トテ別ニハ建テラレスシテ法隆寺ヲ再建シテ斑鳩寺トモ法隆寺問寺トモ稱シタレハ後世ハ一ツ寺ノ別稱トナリテ焼失前トハ其ノサマヲ異ニセリ今其ノ徴ヲ掲ケテ焼失前ノ大略ヲ示スヘシ

すなわち、黒川は、『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』、『日本書紀』、『聖德太子伝私記亦名古今目録抄』、『上宮聖德法王帝説』、『七大寺年表』、あるいは法隆寺金堂薬師像光背銘など、法隆寺の創建および再建に関わる古史料を涉

獵し、按配した結果、もともと聖德太子は同じ斑鳩の地に、推古二年に斑鳩寺を、同じく十五年に法隆寺問寺が建立されたのであるが、斑鳩寺は天智八年に、また法隆寺問寺もその翌九年にそれぞれ焼失、その後は別々に再建されることなく、和銅元年に至って法隆寺として再建された、というのである。それぞれの史料に見られる記事が無謬と見なして、寺の異なった呼称、異なった建立、あるいは焼失の年代を生かし、辻褄を合わせたところに、まさしく国学者の面目躍如たるものがあると言えようか。

さらに黒川は、『古今目録抄』や『法隆寺伽藍縁起并流記資財帳』の記事に照して、金堂の建築・壁画・天井や天蓋の模様、堂内の薬師像や釈迦像、五重塔の建築・塑像・壁画、中門、廻廊、溝堂、南大門、東院に言及し、考証して余すところがない。

たしかに、黒川の「法隆寺建築説」も、実物検証によるものとはいえず、それは古史料の記事との比較考証を出るものではない。黒川の関心は、法隆寺の建築自体にあるというよりは、より多く古史料の記事の真謬性の高さを検証することにあったと言えよう。しかし、ここで指摘しておきたいことは、この黒川論文が、いかに識者の関心を法隆寺

の古建築に向けさせることになったか、である。ちなみに、それまで日本の社寺建築に関する手引きといえは、黒川の執筆になる明治十一年刊行の『工藝志料』木工の部に、神社と仏寺の項があるばかりであった。ところが、法隆寺の名は、二十一年の増訂版においてすら、仏寺の沿革史の上にもまだ見出しえないのである。黒川自身にとつても、明治二十一年の美術取調は、顯真の『古今目録抄』の精緻なる記事の検証を出なかつたとはいへ、やはり感動的な法隆寺建築との出会いと言ふべきであろう。

そして、何よりも特筆すべきことは、この明治二十三年の『國華』の第九、十、十一各号に三回にわたつて連載された黒川眞頼の「法隆寺建築説」は、当時、東京帝国大学の工科大学造家学科に在学中の学生たちの、これまで西欧諸国や中近東やインドの建築にのみ向けられた眼を、熱いまなざしをもつて日本の古建築に、わけても法隆寺建築に注がせることになる大きな役割を果たしたという点である。こうして、早速にも二年後の明治二十五年に始まる石井敬吉の「日本佛寺建築沿革略」の連載を皮切りに、二十六年には伊東忠太の「法隆寺建築論」⁽⁸⁾、ついで二十七年には塚本靖の「法隆寺建築裝飾論」というふう⁽⁹⁾に、矢継ぎ早

に造家学科出身の俊秀たちの論文が『建築雜誌』の各号にぎわせることになる。

なお、明治二十三年におけるこの黒川眞頼の「法隆寺建築説」が、その後の日本建築史の学界に大きな波紋を広げていくことになるのは、また何よりも法隆寺を震撼させることになるのは、推古創建時における斑鳩寺・法隆寺問寺二寺併立説はともかくとして、何よりも現法隆寺西院伽藍をして、『日本書紀』に言う天智八年の斑鳩寺の罹災、同九年の法隆寺焼失以降の再建であるとする国学者黒川の年来の主張である。すでに本稿のその一「明治初期の国学者による玉虫厨子の研究」で述べておいたように⁽¹⁰⁾、黒川はすでに前年の二十二年五月十一日に皇典講究所における講演「東大寺法隆寺の話」のなかで、現在の法隆寺の堂塔が推古創建のものではなく、天智紀に言う法隆寺罹災後の再建であることを強調しているのである。

予明治十五年法隆寺に至り、寶物を拜見せしついでに寺僧に問ふ、此の寺の建築は何天皇の御代なりや、僧答へて推古天皇の時御建立のまゝなりと云ふ、世人も亦推古の舊物なりと思へり、然れども此の寺、推古の舊物にあらざるとは、天智紀八年の條に是冬災斑鳩寺と見

え、同紀九年の條に、夏四月癸卯朔壬申夜半之後、穴三
法隆寺二屋無餘と見えて、日本紀を読みたるほどの人
は、誰も知りたるべき事なれど、心づかぬにやあらん、
まさしく法隆寺再建論の嚆矢といふべきであり、正史の
記述を無謬とする国学者の面目躍如たるものがあるといえ
ようが、黒川のこの講演であれ、一年後の論説であれ、発
言者の黒川が、ほかならぬ国文学界・史学界の第一人者で
あり、何よりも二十一年の美術取調の際の政府委員の有力
な一員であることに、法隆寺は深刻な危機感を抱かざるを
えなかつたはずである。また、黒川の「法隆寺建築説」の
投じた一石の波紋は、当時、東京帝国大学工科大学の造家
学科に学ぶ若き建築史家をして、法隆寺をはじめ日本建築
に関心を抱かしめることになる。

二 明治二十六年の伊東忠太の演説「法隆寺 建築論」

1 法隆寺研究の動機

はじめて法隆寺建築が、実測によって調査され、その研

究成果が世に問われたのは明治二十六年（一八九三）十月
十一日、日本建築学会通常会において催された大学院学生
工学士伊東忠太の演説「法隆寺建築論」をもって嚆矢とす
る。その内容は、翌十一月に刊行された『建築雜誌』第
八十三号に収録されている。

ちなみに伊東は、現在東京大学に保管されている自筆の
履歴書によれば、⁽¹³⁾前年の明治二十五年七月十日に東京帝国
大学工科大学造家学科を卒業、同日大学院の入学を許可さ
れている。また同じく別の自筆の略歴書によれば、⁽¹⁴⁾大学院
では満五年間日本建築学を専攻した旨が記されている。

では、伊東が、法隆寺建築の実測調査に当たったのは、何
日頃であろうか。後年に伊東の筆になる「法隆寺訪問記」
⁽¹⁵⁾には、次のように記されている。

抑々私の古建築訪問の第一歩は大和の法隆寺で、明治
二十五年の事であつた。それは一つには日本建築史の資
料を得る為め、又一つには千有餘年の古都に遊んで心行
くばかり懐古の情に耽りたい為であつた。（中略）

数々の建物や寶物などを一通り観盡して事務所に歸へ
れば、千早老師は扶けられて座に就かれ、見えぬ眼をし
ば叩いて法隆寺の由緒を言葉短く物語り、さて容を改め

て、か程の靈場なれども浮世の波風には勝つ由もなく、見らるゝ通りの有様となつたのは如何にも口惜しい次第である。寺の仏像や壁画については、寶物取調所の役人達が来て調べ、何れも伽藍建立当時のもので、世にも稀なる作品だと折紙をつけて行ったが、建物については何の調べもされなかつた。御邊は建築の専門家とや、是非によく取調べて給はれと、とぎれとぎれに話された。

私は楓實賢師の坊に宿を借り、一簞の食、一瓢の飲、颯颯たる松風に髪を梳り、蕭々たる村雨に身を浴し、鳥の音獣の聲を友として、数ヶ月間伽藍の實測に精進した。晝はひねもす堂塔に立て籠つて、勿體なや規矩を佛尊に加へ奉り、準繩を殿堂に施し、夜はよもすがら螢の如き燈下の下に讀書や製圖の三昧に入ったのである。

この伊東の回顧によれば、伊東が實測調査のために法隆寺を訪ねたのは、明治二十五年であり、伽藍の實測はじつに数ヶ月に及んだことが知られる。なお、文中に、「蕭々たる村雨」という秋から冬にかけての季語が見られるので、二十五年も後半に入つてのことであり、当然、伊東が大学院に入学した七月以降のこととなる。前述の伊東の履歴書によれば、翌二十六年の二月四日には、東京美術学校

より、建築裝飾術の授業を嘱托されており、続いて二月七日には帝國博物館より、建築に関する物品調査を嘱托されるなど、年が明けてから身辺にわかに忙しさを加えているところをみると、伊東の最初の法隆寺滞在は、二十五年の年内とみられないことなのである。

もっとも、この「法隆寺訪問記」から十年後の昭和十五年にも、伊東の談話を収録した「法隆寺研究の動機」が残されているが、⁽¹⁶⁾そこでは、「私は明治二十五年の秋から準備にかかり、二十六年の春實測著手の為め第二回の法隆寺訪問を試み、始めは法隆寺内の一院（院主は楓實賢師）に寄寓し、後には東院伽藍前の大黒屋に宿泊して居た」と語っている。第二回の法隆寺訪問と言っているのは、二十四年にもまだ学生だった時分に、二十二年より日本建築学の講義を担当していた木子清敬講師の指導の下に京都奈良地方の見学旅行をした際に、初めて法隆寺を訪ねているからである。⁽¹⁷⁾ちなみに、伊東には『浮世の旅』と題する学生時代の日記が遺されており、その明治二十四年七月二十三日の条に、法隆寺訪問の記事が見られる。⁽¹⁸⁾残念ながら伊東の日記は、二十五年の八月までで終つている。

そうなると当然のことながら、当時の法隆寺の寺務日記

早速法隆寺に照会したところ、明治二十五年、二十六年の寺務日記には、伊東の名が見出されないといい、山内の一院に於て。当時の管長である千早定朝師にも会い、山内の一院に長期に滞在しての実測調査であつてみれば、寺務日記に記載がまつたくないというのも、いささか不審である。

ところで、法隆寺の実地調査といへば、すでに明治二十三年の夏、当時、伊東より一年上級に在学していた石井敬吉が、京都、大阪、奈良の諸寺を五十日ほど実地に調査しており、翌二十四年六月に「日本佛寺建築沿革略」の稿を起こしている。⁽¹⁹⁾その連載が始まるのは、二十五年二月発行の『建築雑誌』第六十一号からであるが、著者は、稿を起こすに当り、総論の冒頭で、こう述べている。

日本建築ノ沿革ヲ究ムルハ實ニ一大事業ナリ何トナレハ建築物ノ沿革ヲ究メント欲セハ之ヲ實地ニ調査スルノ外別ニ正道ナケレバナリ建築物ハ國家紀念ノ大部ヲ占ム建築物ハ歴史ノ燈臺ナリ陸標ナリ建築歴史ハ獨リ其ノ燈臺ニ光ヲ點シ陸標ヲ指示スルニ止ラス現在ノ美術ヲ照ラシ未來ノ方針ヲ指示スルモノナリ建築歴史ノ要豈大ナラスヤ日本建築ノ歴史ナキハ早ニ先輩ノ憾トスル所ナリ書生今心ヲ傾ケテ一二企ツル所アリ河海ニ向ヒテ細流ヲ注

クノ微意ナリ

こうして石井は、わが国で最初の日本建築史を試みることになるのであるが、その特色とするところは、「稿ヲ起スニ當リテ最モ困難ナリシハ時代ノ大別法ナリ」と著者自身が述懐しているように、太初より近世までの日本仏寺建築の流れを、著者の言う「建築體式」にもとづいて、時代を十期に分けてある点である。⁽²⁰⁾なお、当初の「建築體式」という用語は、連載の途中から「建築様式」あるいは「建築式」に改められている。文献上の考証とともに、実地研究による様式の検証がなされている点が注目されるのである。様式による時代区分は、岡倉覺三が、明治二十三年から二十五年にかけて東京美術学校で行つた「日本美術史」の講義においてもなされている。岡倉に倣うところがあつたか否かはしばらく措くとしても、ほとんど時期を同じくして、時代様式史としての日本建築史が試みられていることに、すこぶる興味をおぼえずにはいられないのである。

なお、石井敬吉に関しては、すでに石井自身も、「昨年夏、半百日ヲ京坂寧楽ノ間ニ消ス古塔大利ヲ歴覽スルコト一回恰モ奔馬ニ鞭シテ燈火ヲ過キルガ如シ其見ル所粗漏ナルハ素ヨリ其所ナリ」と述べているように、たしかに綿密

さに欠けているとはいえ、やはり専門家の眼を以てした実地調査にもとづいた、少なくともわが国で初めての体系的な日本建築史の述作である「日本佛寺建築沿革略」の著者であるにも拘らず、あまりにもその名が知られること少なすぎたように思われる。

このたび、東京大学工学部建築学科の厚意によって、石井敬吉の履歴を知ることができたので記しておきたい。

石井は、伊東より一歳年長の慶応二年（一八六六）の茨城生まれで、明治二十一年七月十日に東京帝大の工科大学造家学科に入学、二十四年七月十日に卒業、同日大学院入学、翌二十五年三月二十三日には、早くも助教教授に就任、三十一年の十二月二十八日に東宮御所御造営局技師に任ぜられている。

その石井が、『建築雑誌』に連載中の「日本佛寺建築沿革略」のなかで、法隆寺の建築について論述するのは、二十六年四月の第七十四号においてである。²¹ 法隆寺を、第二期の聖徳太子の時代に属するものとし、金堂、五重塔、仁王門（中門）、廻廊が、「共に甚だ古く且つ同時代の建物と判せらる。」旨を指摘し、三者の「建築式」が同一であることを断じている。そして、三者に共通する後世には類のない

建築式の特徴として、まず何よりも雲形の肘木および枅を挙げている。またとくに柱については、これをギリシャの神殿建築におけるドリック式の柱に擬し、「双盤なくして直に石敷上に立てり、柱は中央にて太く上部に至るに随つて細し、大斗は西洋建築のカピタルに相應し、其下にはアバカスの意ある厚き方形板あり、門は丹塗にして柱の間は偶の間が中の門より狭きこと希臘建築に於けるが如し」と述べ、「之を要するに構造的思想は時と地との相隔絶する希臘と日本との如きに於ても却つて大に暗合する所あるを見るなり、」と結んでいる。²²

さて、再び伊東の「法隆寺建築論」についてである。伊東は、石井が聖徳太子の時代に属するとした法隆寺を、はつきり推古建築と呼んで日本建築の起源とさえ見なしている。²³

日本建築の粹は寧楽の朝に於て其極致に致達し、寧楽の建築術は吾人其推古の朝に胚胎するを見る。而して推古建築は獨り法隆寺に於て其精華を極めたるを見るなり。是故に法隆寺建築は之を日本建築の起源と云ふも亦た甚だ過當にあらず。況んや又其規模其手法は皆能く東洋美術の粹を聚めて終に一派の形式を大成せしものな

り。吾人の法隆寺を見る豈尋常一様の建築に均しふして可ならんや。

しかるに、と伊東は言う。そもそも法隆寺の名がつとに世人の耳朵に触れるに至つたのは、泰西の美術論者ビゲローやフェノロサ等が堂内にある彫刻絵画を見て、その非凡の名作たることを看破して以来のことである。さらに全国宝物取調局が設置されるに至つて、奈良の地は我国古代美術の中枢となり、法隆寺は東大寺とともに最も貴重なる美術の府となるに至り、終に法隆寺の名はあまねく世人の誦するところとなつたのである。それもこれも法隆寺の彫刻と絵画とに由来してのことではないか。

世人は彫刻と絵画とを以て美術とし、法隆寺の建築を以て單に斯の美術を蓄藏する一箇の器械と認定せり、世人は全く法隆寺の建築に就ては記憶せざりしなり。他なし、世人は絵画と彫刻の美術たることを知て、未だ建築の美術たることを認めされはなり。

かくして伊東は、まぎれもなく建築が美術である所以を實際に指摘して、世人の蒙を啓くことこそ斯学に志す者の急務であるとして、その標品を法隆寺に撰び、之を実測模写して以てその規模の善美なる所以を明かにし、その形式

を永遠に伝え、以て朽ちざらしめんとするのである、と述べている。

ちなみに、明治二十一年の美術取調においても、杜寺の建築が調査の対象から、ひいては等級付けの対象から除外されていたわけではない。前章で述べておいたように、法隆寺の調査状況を報じた『官報』には、法隆寺に現存する諸建築をして、彫刻、絵画、工藝と同様に「美術ノ模範歴史ノ参考」と目している。また、『奈良縣宝物精細簿』に綴じられた法隆寺関係の目録には、²⁴六等級の一覽表が掲げられ、文書、絵画、彫刻、工藝、書蹟に加えて建築の項目が認められる。しかし、その建築の項目には、わずかに二等の欄に一と記入されているだけである。一等から六等までの総数三一二点のなかでの建築一点なのである。ちなみに、絵画は五三点、彫刻一五九点、工藝五七点に比べて、なんと片手落であることか。

では、なぜ建築が零に近いのか。それは建築をして美術として評価する術すゝを知っている者が、美術取調の一行のなかに誰ひとりいなかったからでもある。近畿の古社寺に蔵されていた彫刻、絵画、美術工藝、あるいは古文書については、これまでも再三調査が行われてきたにも拘らず、

建築については、營繕関係の調査以外にはほとんど行われずに来たからである。いや、それまで日本建築を専門に研究した本格的な建築史家そのものがいなかったからでもありといえよう。

それというのも、建築の学の最高学部としては、早くも明治六年（一八七三）に東京工部大学校に造家学科が開設され、その後東京工部大学校は十九年に帝国大学令の公布とともに東京帝国大学工科大学となったが、これまで外国人お傭い教師のコンドル (Osrah Conder 1852-1920) を中心に西洋建築学万能であった造家学科に初めて日本建築学の科目が設けられるのは、十二年に卒業し英国に留学していた第一回生の辰野金吾が十六年に帰朝し、十九年に工科大学の教授となったからのことである。⁽²⁵⁾ その動機となったのは留学中に辰野が師事した建築家のバージス (M. Borges 1828-1881) から、日本の伝統的な建築について問われて何一つ答えることができなかったために、バージスから、日本へ帰ったら何よりもまず日本の建築を研究するように、という忠告があったからであるといふ。⁽²⁶⁾

しかし、辰野によって日本建築学の科目が設けられることになったものの、この講座を担当できる適任者はなかなか

かえられず、止むなく当時宮内省内匠寮の技手をしていた木子清敬を、二十二年から講師として嘱託している。⁽²⁷⁾ しかし、その講義の内容は、伊東自身の語るところによれば、⁽²⁸⁾ 主として、神社、仏閣、宮室の木割法等の実験的な説明であつて、建築の史的な方面には、ほとんど触れるところが多かつたといふ。

ところで、伊東の卒業論文の題名は「建築哲学」であつた。リューブケ著の『世界藝術史』や、大江篤介訳の『維氏美学』やラスキンの『建築の七燈』などに負うところの多かつた⁽²⁹⁾ という伊東が、大学院に入学してからは研究題目に「日本建築」を選んだのは、もともと芸術や歴史にすこぶる関心が深かつたことに加えて、かねて辰野から聞いていたバージスの話も遠因となつており、また近因としては、木子の講義を補充して学問的に組織し、日本建築の本質を闡明にし、とくにその芸術的価値を検討してみたいという欲望にあつた、といふことであるが、私には、やはり明治二十一年の美術取調に巻きこまれた、いわば空前の日本美術ブームの風潮とも関係があるように思われる。そうしたなかで不当にも建築だけが美術からはずされていることへの苛立ちにあるものと言えよう。伊東の「法隆寺建築

論」には、近畿の美術取調からの帰京報告とでもいうべき、明治二十二年の春に皇典講究所で行われた二つの講演、すなわち、小杉樞郎の「美術と歴史との関係」、黒川真頼の「東大寺法隆寺の話」、さらにはその翌年の黒川の論説「法隆寺建築説」による触発ないし影響なしとしないように思われるが、とりわけ、法隆寺建築の源流を西方に遡って求めるのは、まさしく岡倉の日本古代美術観に倣っているものと言つてよい。

伊東は、法隆寺の歴史上並びに美術史上の地位を論ずるにあたって⁽³¹⁾、歴山大王の東征から説き起し、健陀羅国王迦賦色迦^{ニシカ}の仏教公布に及び、この地における希臘印度派の発生について述べているのであるが、それはまさしく岡倉が、天智時代の美術、すなわち今日に言う白鳳時代の美術を印度希臘風と見て、その淵源を求めてアレキサンダー大王の東征にまで遡つたのと同断であり、岡倉の影響なしとしないのである。

爰に中央亜細亜の地に希臘印度兩式の美術相値遇して一種の希臘印度派^{ギリシヤインド派}と稱する美術の發達を致したり。而して其中樞となれるものは即ち方今「阿富迦賦斯坦」^{アフガニスタン}の健陀羅^{ガンダハラ}之れなり。

フェルギュソン氏著印度建築史に健陀羅建築^{ガンダハラ}を詳説せり。

ここで、フェルギュソン氏著というのは、ファーガッソンの『印度及び東洋建築史』(James Fergusson: History of Indian and Eastern architecture, London, 1876) をXUしつて⁽³²⁾、では、その希臘印度派の美術は、本邦においては、どのような展開を示すのか。

今更に本邦美術の傳來に就き至細に其經歷を觀察すれば、彼の希臘印度式なるものが一たび支那に入りて爰に一種の新形式を作り、而して本邦に傳來するに當りては、吾人は其二様の經路を取るを見るなり。一は三韓を經百濟人の媒介に由て傳來するものにして之を推古式と名くへし、一は直ちに唐土より傳來するものにして之を天智式と名くへし、而して其後を受くるものは之を天平式と號すへし。余は今彼に名くるに三韓式を以てし、此を呼ぶに唐式を以てせん。是故に其系式左の如し。

三韓式 推古式自佛教傳來至孝德天皇 凡ソ九拾六年

唐式 天智式自元明天皇至桓武天皇 凡ソ六拾六年

かくして伊東は、それ故、いま本邦美術、とりわけ建築

美術に就いて論述するためには、まず筆を推古式に下すのが順序であり、その標品はと言うと、ギリシャ、インド、中国、朝鮮の諸式の粹を取り精を聚め、以て楣式建築の極致に到達した推古建築が、幸いにして奈良旧都の辺に孤立するではないか。これすなわち法隆寺であり、法隆寺の建築界における真価はじつにここに在るのだ、と言うのである。

ここで、伊東が示している推古式、天智式、天平式という系式は、まさしく岡倉の時代区分に倣つてのことであることは、岡倉が明治二十三年から二十五年まで東京美術学校で行つた「日本美術史」の講義に徴してみても明らかである。

ちなみに、伊東は、すでに述べたように、大学院に入つた翌年に当る明治二十六年の二月四日に、東京美術学校より、建築裝飾術の授業を嘱託されている。それは工科大学の造家学科における西洋建築史の教授であつた小島憲之が、校長の岡倉と親しかったところから、小島によつて推薦されたのである。⁽³³⁾ また続いて二月七日には、帝国博物館より、建築に関する物品調査を嘱託されることになる。當時、岡倉は臨時全國寶物取調局委員でもあり、全国にわ

たつて寶物調査のかたわら、建築についてもかなりの研究を積んでいた。こうして伊東は、岡倉から日本建築史に関して、啓蒙されること少なくなかつたものといえよう。加えて黒川眞頼も、当時東京美術学校の教授であり、⁽³⁴⁾ 黒川と語り合う機会も少なくなかつたはずである。

以上、見てきたように、伊東の法隆寺建築に対する関心は、まさしく推古建築にのみあつた。それゆえ、伊東の実測による調査も、伊東が法隆寺における最古の建築と目した西院伽藍の中門・塔・金堂に限られたのである。伊東は、この三建造物が同じ時代に、同じ様式で作られたものであることを確信する。⁽³⁵⁾ この確信に基いて彼の「法隆寺建築論」が展開されることになる。

法隆寺の数は其数素より甚だ多し。而して余が実測したるものは獨り中門、塔婆及金堂の三字なりとす。蓋し以上の三字は其年代相均しく其形式相均しく而して其手法亦た相均しく三者相率ひて共に法隆寺式と名くへき一流派に歸すればなり。(傍点筆者)

ここで伊東が、日本における初の法隆寺建築の実測調査において、法隆寺の中門、塔、金堂の建築をして、この三字は、その年代、形式、手法、ともに相均し、と断じてい

るのは、伊東自身のみならず、その後の日本建築史家の法隆寺建築観を決定付けるものとして、すこぶる重要である。伊東の言う法隆寺式の用語も、多分に岡倉に倣ったものであろうが、この法隆寺式建築をまぎれもない推古時代の建築と目して疑いはないところから、当然のこととして、聖徳太子の創立のまま今に存する、じつに千有余年の旧物なり、との確信も生まれてくる。

2 法隆寺非再建論の発端

——天智羅災幸隆寺説の背景——

さきに黒川真頼の提起する法隆寺再建論については述べておいたところであるが、伊東は、黒川の「法隆寺建築説」をして、見るに足れり、としながらも、説中当寺炎上のことを載せたり、依って寺伝に就いて之を訂するに、と述べて、左の古老の伝なるものを掲げている。⁽³⁷⁾

又古老の傳に、日本書紀に載る所の古記に原本二本あり、一は法隆寺に火災ありと記し、他の本には幸隆寺火災ありと記す。此法隆寺は法隆寺末寺伽藍の一にして北の方字信乃と云へる地あり、本寺を去ること三町以内なり、共に法隆寺或は斑鳩寺と総稱す。此等昔日全焼して

今に再興なし、故に一本の分は遠所に在つて総稱を唱へ、法隆寺と云へる傳聞記載の分を載せり、他の一本は近在に在て實際の儘記せし故に幸隆寺焼失とせし分を取れり、是言總異別にして法隆寺焼失に非ず云々。(傍点筆者)

要するに、古老の伝によれば、焼けたのは法隆寺の末寺の幸隆寺であつて、本寺の法隆寺ではない。もともと日本書記の原本には二つあつて、そのうちの一つが幸隆寺を法隆寺と誤つて伝えたのである、と云うのである。

この古老の伝が、何に依拠したものであるか、伊東はその出所を示していないのであるが、注目すべきことには、伊東の「法隆寺建築説」が発表された翌月に、すなわち明治二十六年の十一月に執筆された鳥居武平著の『法隆寺伽藍諸堂巡拜記』にも、また同著の巻末に寄せられた塚田武平の論説「天智天皇の朝に法隆寺に災すと云の辨」にも、まったく同じ内容の、法隆寺の天智羅災は末寺の幸隆寺の誤りとする説が掲載されていたのである。

では、なぜ明治二十六年に、まったく時期を同じくして同じ内容の古老の伝なるものが、いつせいに巷間に流布されることになるのか、不審に堪えないところであるが、先

ごろ奈良県立図書館において明治の奈良県寺院関係資料を調べてみたところ、明治二十六年三月に、法隆寺より奈良県に提出された『寺院什寶物調書』（奈良縣社寺係「古社寺明細帳」所収³⁹）に、その出所を見付けることができた。すなわち、巻末に綴じられた法隆寺管長千早定朝識の「古跡并叟田」のなかに、（日本紀異説）なる一文があり、そこに、伊東、鳥居、塚田らの掲げる古老の伝と、内容はもとより字句に至るまであらかたの一致を見る、まさしく「古老ノ口傳ニ依レバ」に始まる天智羅災幸隆寺説が縷々として記されていたのである。

ちなみに、千早定朝は「古跡并叟田」の序文で、法隆寺の宝物調査書のなかで、ことさらに未聞の古説を記す動機を左のように述べている。

余曾テ元治元年ヨリ慶應四年ニ至リ法隆寺要録ノ抄數本編集ス 其際斑鳩文庫旧記古傳記并塔中支院ニ傳來ノ古日記隨筆裏書等一讀ス 其支院ニ傳來ノ古傳記ニハ未聞ノ古説或ハ奇説等種々珍説アリ 余ルニ此塔中ノ旧記類雜新ノ際惜哉散乱シテ遂ニ反古ニ帰シ今ハ亡テ無シ再読スルニ由ナシ 余未タ忘記憶スルモノ勘カラス 之ヲ記載セント欲スルモ余固ヨリ眼疾ニシテ近來物色不明読書殊

ニ勞ス 故ニ自分ニ筆ヲ取ルヲ不得 遂ニ古説ノ消滅セシメ遺憾ニ不堪依テ侍者ヲシテ暗記ノ儘演舌ヲ聴記セシメ且ツ現存ノ古傳記ノ中參考トナルヘキ要文ハ其儘書記セシム 依テ文体一様不成或ハ重筆ノ處モ往々有之 唯古説ノ持來ニ傳ヘン」ヲ欲シ其正不正ニ至テハ後賢ノ鑑定ヲ待而已

千早定朝謹識

こうして（日本紀異説）が口述されることになるのであるが、それに先立って千早老師は、（葦垣宮跡）と（幸隆寺旧跡）について論述し、それぞれその所在地が考証されている。葦垣宮の在りかが問題となるのは、推古紀には、上宮太子の薨去を、斑鳩宮と記しているのに、『大安寺縁起』では、飽波の葦垣宮としているからである。千早は（日本紀異説）において、もともと斑鳩宮は総名であって、飽波にある葦垣宮も、斑鳩宮とも上宮とも称せられたのであり、斑鳩宮と葦垣宮との関係は、末寺の幸隆寺を法隆寺の総名で呼んだのと同じ例である、と云うのである。（葦垣宮跡）についてはしばらく措く。（幸隆寺旧跡）については、次のように述べられている。

斑鳩宮則今ノ東院伽藍ヨリ三町余良位ニ当テ貳町四方

ノ田面悉ク幸隆寺ト字ス 是レ幸隆寺伽藍ノ旧跡也田中宮寺則令

ノ字御田敷百リス
町余北位ニ相当ス

古老ノ口傳ニ據レハ往昔上宮王府ノ家臣ニ秦ノ臣幸隆ト云フモノアリ 上宮王令シテ中宮付キニ命シ玉フ 乃チ具恩徳ヲ報シカ為メニ佛閣造立ノ志願ヲ発ス(中略) 中宮ノ北隣地信乃ニ佛閣ヲ造立シテ其門前ニ屋敷ヲ設ケ彼ノ寺ノ檀越トナル 故ニ時ノ人又実名ヲ呼テ幸隆ノ寺ト云フ 後チ之レヲ又音ニ呼テ寺名ヲ幸隆寺ト号シケル 余ルニ此寺并檀越秦ノ幸隆ノ子孫及ヒ親族徒類等ノ在家衆悉ク焼失ス 其焼跡原野トナリシヲ后開発シ田面トナリ果テ畢ル(以下略)

続いて、大永三年(一五二三)の寺領段錢帳に、幸隆寺分の供田や公田を記した箇所が少なからずあるとして、それらの反数や領主の坊主の名を抜書し、一覧表にしている。なお、幸隆寺という地名は、明治十二年(一八七九)における大阪府堺縣の調査による『大和國平群郡寺院明細帳』⁴⁰⁾にも、幸隆寺の名が、平群郡幸前字垣内にある融通念仏宗の寺として見えており、由緒不詳と記されている。境内は百八坪で、本堂と庫裏のほかには薬師堂一字の名が挙っている。しかし、今日、幸前には、寺の建物も、また

寺跡も残つてはいない。

ちなみに、この明治十二年の『大和國平群郡寺院明細帳』には、法隆寺については、その由緒として、眞先きに本尊薬師如来像の後背銘を掲げ、亡き用明天皇の誓願を果すべく、推古天皇と聖徳太子ともに謀り、推古元年より始て首尾十五年を歴て、推古十五年(六〇七)二月に造畢り落慶供養をしたのが、則チ法隆寺西院伽藍是ナリ、として、推古天皇伽藍造畢十五丁卯ヨリ明治十二年ニ至リ千二百六十一年、と記している。それゆえ、金堂の内陣四圍の壁画も天井の反花蓮花の画も、咸ク鳥佛師之圖畫也、と目して疑うところがないのである。その後、金堂の壁画については、明治二十一年の美術取調の際に法隆寺から提出された「法隆寺伽藍及ヒ民間什寶番號牒」(奈良縣寶物目録所収)には、曇徴作となつている。いずれも法隆寺金堂を推古時代の建築と確信してのことである。

ところで、法隆寺管長の千早定朝は、なぜ『寺院什寶物調書』の巻末に、自らの名を以て建白書にもひとしい(日本紀異説)を奈良県に提出したのであるうか。じつは『寺院什寶物調書』が提出された同じ明治二十六年三月に、やはり法隆寺より『寺院明細帳』(奈良縣寺院明細帳)平群郡

(41) 所収)が奈良県に提出されているのであるが、後者が法隆寺の西院・東院両伽藍の沿革および本尊を始めとする佛躰并に器物の明細の登録が主体をなすのに対して、前者は後者のいわば別冊をなすもので、前者に記載が洩れた什寶器物が法隆寺に登録されてはいるものの、その実は、まずは勝鬘会の由来から筆を起し、法隆寺が創建以来維新に至るまで、いかに歴代の天皇の庇護を受けてきたかを、縷々として書き列ねているのである。

そこで、右に関連して紹介しておきたいのは、明治十七年四月二日に、法隆寺信徒総代と住職千早定朝の名をもって、大阪府知事宛提出された宮内省への御進達願である。上願書は宮内卿伊藤博文に宛てられている(自明治十七年至全十八年『法隆寺保存願出類』庶務課社寺掛、所収)。

願

大和國平群郡法隆寺ハ人皇三十二代 用明天皇ノ勅願ニ因テ 推古天皇ノ御宇聖德太子ノ創立シタマフ所ニシテ現在ニ至ル迄殆ト一千三百年堂宇伽藍依然現存ス實ニ本朝第一ノ古刹ニ御座候 当時ニ在テハ播摩國揖東郡佐勢ノ地水田三百町ヲ賜ヒ 聖武天皇天平十一年ニハ播摩國賀古郡壘田一百町播津國住吉郡壘田二十五町近江國

坂田郡八町七段一百七十三步 清和天皇貞觀元年東院修繕ノ時大和國平群郡水田七町四段 白川天皇承曆二年供田二町 順德天皇嘉祿三年播摩國鶴庄水田十八町 後醍醐天皇元徳二年備前國ニ於テ若干地各之ヲ賜ヒ以テ当寺ノ保存ヲ計リ佛法興隆ノ基礎ヲ立テタマフ叡慮ノ深厚感佩ニ不堪奉存候(以下略)

このように、聖德太子創立の法隆寺がいかに歴代の天皇の庇護を蒙ってきたかを縷々として書き列ねている。そして明治維新の際の寺地悉く召上げられ、堂宇伽藍日に荒廃を深めていく有様を痛恨をもって訴え、次のように願っているのである。

如此キ御有縁ノ当寺ヲ以テ特別官寺ニ御取立相成皇太子ハ御追賞ノ証トシテ可然キ御尊號ヲ諡ラセラレ度奉存候 是誠ニ皇太子ノ御功德ニ報ハセラ、最大ノ御美擧ニシテ千三百年ノ古刹ヲ自ラ萬代ニ保存スルノ道ヲ得 海外ニ對セラレ文明政度ノ御光德ヲ御増輝アラセラルヘキ御事ト奉存候 すなわち、聖德太子創業のこの千三百年の古刹を自ら、万代に保存するためには、特別官寺に取立てるなど、格別の配慮を賜わりたい旨、宮内卿に懇願しているのである。

明治二十六年の『寺院什寶物調書』に名を籍りて、聖徳太子による創建のかた法隆寺がいかに皇室と深い関係にあったか、歴代天皇の庇護のもとにあったか、を詳細に列挙しているその意図は、明治十七年の宮内卿に対する上願書に照して明らかである。千早定朝管長の識になるへ日本紀異説に云う、古老ノ口傳ニ依レバ、に始まる天智罹災幸隆寺説も、こうした一連の文脈のなかでとらえることが必要であろう。

思うに、維新の際に寺地を悉皆土地申附けられた法隆寺の経済的困窮に加えて、明治二十一年の美術取調の一行である、黒川眞頼、小杉楹邨らの、正史の記載を無謬とする國学者による天智九年法隆寺罹災説が、どれほど法隆寺に存亡の危機感をあたえることになったか、想像に難くないのである。法隆寺の再建論の抬頭は、まさしく、聖徳太子創業の千三百年の古刹を万代に保存するために、宮内省の格別の配慮を賜りたいとする法隆寺の主張の根幹から揺がすことになる。とりわけ黒川眞頼の「法隆寺建築説」が、どれほど法隆寺を震撼させることになったか、あらためて思わずにはいられないのである。

そうした法隆寺にとって、若冠二十五歳の新進の建築学

者伊東忠太を迎えたことは、百万の味方をえたおもしろいしなかつたであろうか。また伊東は、眼疾に悩む千早定朝老師から、法隆寺の法燈を守らんとする切々たる想いを聴くにつけても、法隆寺建築の実物研究の上から、法隆寺の窮地を扶けたいと思わなかつたであろうか。伊東の非再建論の歯切れの悪さというものは、もともとこうした法隆寺に対する心情的思入れに発しているからではないであろうか。すなわち、伊東は中門・塔・金堂の三建築について、⁽⁴²⁾こう述べている。

世の考證家は斯くの如く論究して其年代を争ふと雖も余は決して之に重点を措かざるなり、建築の年代或は共に数拾年或は百年の前後あらん。然れども其形式均しく、其構造法均しく、其一般の建築的性質だに均しくはこれ學術上同時代の建築と云ひて可なるべし、若し一旦にして互に相異ならば其年代全く均しきもあれ學術上別時代の建築と云はざるべからず。世の考証家は余之を知らず、建築学上の眼孔只たこの三建築の性質を視察するあるのみ、其何の朝に着手し何の朝に成るやは則ち第一二の問題なり。

では、伊東は、何をもって、中門・塔・金堂の形式、あ

るいは構造法の均一を云うのであろうか。ちなみに、伊東は、法隆寺建築を論ずるに際して、まず中門から稿を起こしており、金堂から始めてはいない。それは当然、金堂と中門・塔との間に年代差を見ていないからである。

今法隆寺の三建築を視察すれば、其垂木一支は共に殆んど九寸なり、其中の間と脇の間との比は共に殆んど十と七なり、其雲形の肘木は殆んど同一形なり、其隅木の構造は殆んど同一なり、其柱はエンタシスあるの事實は殆んど共に同一なり、其木材の構架式も亦た殆んど共に同一なり。吾人はこの三建築を以て同時代の建築と見做し、之を同一の流派となすに猶豫せざるものなり。吾人は其建築落成の期が推古の時代に属するや或は和銅年代に属するやを知らず、然れとも余は之を以て断して、推古流派と名くるに躊躇せざるなり。若し建築にして果して和銅年間に成るものならば、必ずや當時の工匠能く推古の古式を取め得て之に法りたるものならん、吾人は他に和銅年中の建築を見るに、其形式は一も法隆寺に似るものあらざるなり。若し、夫れ法隆寺再建の際能く古式を取め得て毫も當時流行の形式に従はざりしやの問題に至りては、之を事実を徴して大に疑はざるを得ざるな

り。

以上陳述する所よりして之を考ふれば、法隆寺の未だ曾て火災に罹らずと云ふもの、或は其和銅年代の再建に係ると云ふものに比して信ずるに近からんか、姑く記して後の識者を俟つ。只余は爰に彼の三建築が共に同時代に属し同流派に属するものたるを明言して憚らざるのみ。

ここで、伊東は、結論として、法隆寺の未だ曾て火災に罹らずと云ふもの、或は其和銅年代の再建に係ると云ふものに比して信ずるに近からんか、と述べて、非再建論に加擔する姿勢を示しているのである。

なお、和銅年代の再建と云っているのは、云うまでもなく『七大寺年表』に、和銅元年（七〇八）に法隆寺を作る、とあり、また『色葉字類抄』卷二にも法隆寺の和銅年中造立の記事が見られるからである。いずれも黒川によつて援用されてきた史料であり、再建年代である。

3 法隆寺式建築の特徴

——雲形肘木とエンタシスの柱——

おそらく伊東は、岡倉覺三の美術上の呼称に倣つてのこ

とであろうか、彼自身の実測した法隆寺西院伽藍の中門・塔・金堂の三建築を、他にその様式の類例が見られないところから法隆寺式と称し、また推古時代以来の非再建と確信するところから、推古流派と呼んでいることは、すでに見てきたところである。

伊東は、緒編のあとの各編を、中門建築説、塔波建築説、金堂建築説の三部に分けているが、その内容は、歴史的考証、プラン、エレヴェーション、プロポーション、垂木ノ制、構架式、内外ノ裝飾、雲形肘木、柱制及ヒ其エントアシス、軒廻及屋根、破風、高欄支柱、の各項目の順で進められている。このうち、中門については、内外ノ裝飾（壁画）を欠き、塔婆については、柱制、軒廻を欠くが、九輪、力士及アトランテス、の二項が加わっている。

実測製図による、長期的な実地調査ならではの報告であるが、とくに伊東が、他に類例を見ない法隆寺建築にいちじるしい主要な特徴として指摘しているのは、まず構造全体に関わるものとしては、構架式の頂に挙げている井籠式の構造である。⁽⁴³⁾

余は法隆寺建築の構造を評して之を井籠式と名くるなり、人若し其意義を知らんと欲せば乞ふ断面図に就て其

詳細を見よ、下層の柱以上には五層の井籠を重疊し、其上に垂木を架け、敷桁を布て以て垂木を柳壓し更に其上に上層の柱を建つ、柱以上は再び下層の井籠式を反覆し、終に小屋に至り屋根に至る。

次に、伊東が挙げるのは、当然のことながら法隆寺建築のいわばトレード・マークと見なされている雲形肘木であるが、伊東は、これをエントアシスの柱との有機的な関連の上で見ている。まず中門についてである。⁽⁴⁴⁾

エントアシスより成れる柱を承けて之をロガリスミツク、カーヴより成れる軒に傳ふ、之をして直線にならしめんか其強剛に失すると其連絡の滑ならざるを奈何ん、是時に當て其尤も適當なる手法は吾人之を法隆寺に見る、雲形肘木の應用なり。

憶ふに當時の建築術には人已に三つ斗の用法を知れるなり、而して法隆寺建築に獨り此異様な組物を用ひたるは何そや、蓋し一は構造の堅牢を企て、而して一は外觀の美を圖りしものに他あらざるなり、己に外觀の美を欲す、之を如何すれば則はち可なる乎、繊細に失すれば則はち建築形式の磊落たる所以と相納れず、粗笨に過くれば則はち其洒瀟なる所以と相反す、是に於て其形粗大

にして而も卑に陥らず、簡素にして而も野に流れず之れ此の雲形肘木が特得の長たる所以なり、雲形肘木は夫れ始より美なり、然れども今爰にエンタシスなる曲線と相照應して更に其美たるを致せり、爰に建物の輕快なる姿勢を扶けて其美なる所以を示せり。

伊東は、このように雲形肘木を、柱のエンタシスの曲線と相照應して、建物の輕快なる姿勢を扶けている、と云うのであるが、中門の建物の輕快さに対して、すこぶる重厚の趣のある金堂の建築に対しても、全く中門塔婆と其手法を均しふせり、とのみ述べている。では、柱のエンタシスについては、どう觀察しているのであろうか。

中門建築の中に就て吾人が尤も奇とする所は其柱の形状に若くはなし、其柱は礎盤なくして直ちに地上に樹立すること猶ほ希臘ドリツク式に於けるかことく而して其輪廓は希臘の所謂エンタシスと名くる曲線より成り、其直径は底部に於て一尺七寸六分ありと雖とも底部より上方柱長三分の一の處に於ては一尺八寸四分余となり三分の二の處に於て再び一尺七寸六分となり、其頭部に於ては迫て一尺四寸となる。

ここで伊東は、柱の高さの三つの部位の直径を綿密に計

測して、そのエンタシスの曲線の性質は、かならずしもギリシャのクラシック建築の場合と相均しいとは云えないが、それは東西の人の嗜好の異なるよりしてこの曲線の使用に些少の差異を生じたるに過ぎざるなり、と述べている。また、金堂の柱のエンタシスについては、さらに詳しく六つの部位の直径を計り、その形が、全く中門と相異なる、ことを指摘し、其の寧ろ豊満にして輕快の感を缺くは其建築全体の性質と相適する所以なり、としている。両建築全体の形の性質の相異を、兩者の柱のエンタシスの比較をとおりに認識に至っているのは、なによりも伊東の実測調査の成果とみてよいであらう。

しかし、伊東は、そうした金堂と中門との建築全体の形の性質の相異を、すなわち、伊東の云う豊満と輕快の感の相異を、時代の嗜好の異なりに由来するものとまでは考えなかつたのである。いずれも手法・時代を相均しくすると見て、ともに推古時代の創建と確信したのである。

なお、伊東は、金堂の柱のエンタシスについて、上層の柱は其外部にのみエンタシスの形を作り、内部は即ち毫も之を作らず以て一奇と為すへし、と指摘しているのは、伊東の調査が、金堂の柱一つとっても、いかに綿密を極め

たかを示して余りあるものと云えよう。

ところで、伊東は、金堂内の玉虫厨子の建築的意匠についても、わずかながら触れている。⁽⁴⁵⁾

内陳土壇の上には数多の佛像あり、而して吾人の尤も珍奇とするものは彼の玉虫厨子に若くはなし、其屋根の形状、其鴟尾の制、其瓦の行基葺なる、其垂木の圓形なる、其組物の雲形なる、皆能く當時の建築式を示すの標品ならざるは無きなり。

ここで玉虫厨子をして、当時の建築式を示すの標品、としているのは、当然、法隆寺式建築と同じように、推古時代の作と目してのことであるが、伊東が、この玉虫厨子について、精密な実測調査にもとづいた、きわめて詳細な報告を提出することになるのは、五年後の明治三十一年（一八九七）に、『東京帝國大学紀要』工科第一冊第壹號に収められた「法隆寺建築論」においてである。

それ以前に、玉虫厨子について、とりわけその裝飾文様について、すこぶる注目すべき調査研究が、伊東より一級下の工学士塚本靖によって発表されることになる。

三 明治二十七年における塚本靖の「法隆寺建築裝飾論」と玉虫厨子に関する言説

1 法隆寺建築を推古式と見る理由

伊東に続いて、翌年の明治二十七年（二八九四）の十月に、大学院学生塚本靖の論説「法隆寺建築裝飾論」が同じく『建築雑誌』の第九拾四号に発表され、伊東と法隆寺論を競い合うことになる。

塚本は、昭和十二年十月の『建築雑誌』塚本靖追悼号に掲載された略歴によれば、伊東より一年遅く、明治二十六年七月に東京帝国大学造家学科を卒業し、十月に大学院に入学して建築裝飾法の研究に携わっている。建築裝飾は造家学科在学中からの研究テーマで、卒業論文のテーマも「Essay on Japanese Architectural Ornament」であった。⁽⁴⁷⁾

さて、塚本の「法隆寺建築裝飾論」であるが、まず緒言において、⁽⁴⁸⁾こう述べている。

法隆寺堂内彫刻繪畫の非凡なのは世既に定論あり 其建築に就いては友人工学士伊東忠太君の嘗て之を精測討

究せられたる為り 戴せて我建築雜誌第八十三號に在り
今余が爰に研究せんとする所は其裝飾是なり

思ふに 本邦建築裝飾の精華は遅く王朝時代藤氏盛世
に於て其極致を見る 然れども此等の精華豈に一朝夕に
して成れる者ならんや 焉んぞ知らん推古天平の裝飾之
が素因を為せるを 而して推古天平の裝飾は遙に其淵源
を漢魏六朝及印度西域に取れるを(中略)

而して其(法隆寺建築の)裝飾の研究に至りては遂に
零簡斷篇の之を論ずる者だに見ざるなり

法隆寺建築其数固より多し 然れども余が爰に研究し
たるは主とし其金堂内部の裝飾是なり 金堂内には彼の
有名なる壁画の外に玉虫厨子持佛堂佛像の臺座及天蓋等
當時建築裝飾の手法を窺ふ可きもの少なしとせず 今爰
に之を併論す

この緒言に見られるように、塚本もまた、前年伊東が、
日本建築研究における、いわば先人未踏ともいうべき実測
調査による法隆寺建築へのアプローチを敢行したのに対し
て、これまた、あたかも伊東の盲点をつくかのように、法
隆寺金堂の建築に附属する内外の裝飾に照明をあたえ、法
隆寺建築の様式的特徴をいよいよ闡明にせんことを試みる

のである。かくして、塚本は、緒言に続いて、総論として
法隆寺建築式、法隆寺建築沿革を論じ、各論として金堂の
建築裝飾論を展開する。すなわち、金堂の外部裝飾とし
て、雲形肘木、卍形欄干、墓股、支柱、建物全体に施され
た丹および木口の黄土、破風および垂木々口の金物に及
び、また内部裝飾として、壁画、玉虫厨子、さらには天蓋
に及ぶのである。

さて、塚本もまた、法隆寺建築の時代様式を述べるに際
して、推古式か天智式かの観点から論じているのは、伊東
の場合と同じであり、その様式論の淵源は、明治二十一年
の美術取調における岡倉らの言説に拠っていることにも変
りはない。すなわち、

所謂推古式と稱する者は支那純粹の美術の西域(中央
及西方亜細亞)の美術を参加したるものにして 天智式
と稱する者は推古以来の美術に乾陀羅美術を渾融し大に
技術の雄渾を加へたるものなり

と述べている。⁽⁴⁹⁾ ここで言う乾陀羅(ガンダラ)美術と
は、伊東の言う希臘印度美術をさしている。塚本は、ガン
ダラ美術についてはこう述べている。⁵⁰⁾

彼の北印度の乾陀羅は曾て歴山大王の侵略を被り 其

後又バクトリア希臘人の支配を受けたり 当時の遺跡は最も希臘古代の式に近くして其盛時は恰も我紀元(皇紀一筆者注)七百年より千五百年の頃にてありき(ファーガッソン氏印度及東洋建築史)

ちなみに、ここで塚本もまた伊東と同じように、ガンダーラ美術に言及する際にファーガッソン (James Fergusson) の『印度及び東洋の建築の歴史』(History of Indian and Eastern architecture, London, 1876) の名を挙げており、また先述した石井敬吉もファーガッソンの名を掲げている⁽⁵¹⁾。過日、私は東京大学工業部建築学科の厚意により、扉に「工部大学校圖書之印」の捺されたファーガッソンの『世界における建築の歴史』(A history of architecture in all countries, 1874 London) をはじめとする諸著に接する機会が与えられ、石井、伊東、塚本らの小社日本建築史家がくびすを接して輩出した百年前の東京帝国大学工科大学造家学科を想い、深い感懐をおぼえずにはいられなかつたのである。

ところで、再び話題を、法隆寺建築の推古式か天智式か、の問題にもどすと、塚本は、この件に関して、次にように伊東の説に疑義を呈している⁽⁵³⁾。

法隆寺の建築が推古式なるや將た天智以後の式なるやに就ては古來種々の説あり 伊東君は既に其法隆寺建築説に於て之を推古式なりと認定し 同時に其希臘印度式を渾加せる者たるを論ぜられたり 然れども氏の説には毫も其推古式たるの理由を示さざるなり 余は左の理由あるを以て推古式なりと信じて疑はざるなり

法隆寺建築(特に金堂五重塔二王門の三字に就て云ふ)は其の形式に於て三井法輪寺(推古天皇三十一年創立の儘)及岡本法起寺(舒明天皇十年創立の儘)等の推古式建築と共通の性質を具有するのみならず(本邦建築中他の時期に決して見ざる雲形肘木を具へ及其屋根勾配柱間の比例等に就て)其裝飾は金堂内安置の玉虫厨子(推古天皇御厨子)及薬師三尊及釋迦三尊の天蓋裝飾と全く同手法に出たり 而して所謂彼の天智式の遺物たる西の京薬師寺(白鳳九年創立)岡寺(天智二年創立)等とは却て相一致する所を見ざるなり

法隆寺建築の推古式たるや明矣 而して同時に其乾陀羅式を加味したる者に非ざるは 余が上述し來たる推古天智両式の性質に照らして昭々たり 之れ余が伊東君の説と相容れざる所以なり

すなわち、塚本は 法隆寺建築が推古式と目する理由として、まず第一には、雲形肘木など他の時期には決して見ない形式を、推古天皇三十一年創立の儘の三井法輪寺や同じく舒明天皇十年創立の儘の岡本法起寺などと共通しているからだ、と述べ、また第二には、建築裝飾の上で玉虫厨子や金堂の天蓋裝飾と全く同じ手法に出たり、と指摘している。さらに第三には、天智式の遺物である薬師寺や岡寺の建築と明らかに相異しているのではないか、と言うのである。

ここで塚本が、雲形肘木などを共通の形式特徴をもつ法輪寺、法起寺の建築年代を、寺の縁起その儘に信じている点はともかくとして、これまで法隆寺建築との関わりの上では注目されることのなかった玉虫厨子や金堂の天蓋を、積極的に取り上げている点、また薬師寺を天智式と目した上で、法隆寺との異同を指摘した点は、たしかに伊東になかった見方であり、塚本の卓見というべきであろう。

なお、法隆寺をめぐる再建・非再建説については、此二説の可否は今日に於て強て之を斷決せざるも可なり、何となれば假令再建説を取も毫も法隆寺が推古式たるを妨げざれば也、と述べているのにとどまる。

2 玉虫厨子の裝飾文様

さて、塚本は、雲形肘木、卍形欄干、墓股などを金堂外部裝飾として取り上げるとともに、同じく建築に深く関わる金堂内部の裝飾として、内壁の壁画を取上げている。そして、意匠の高尚、筆力の雄麗、設色の敦厚なる、實に本邦建築裝飾中の巨擘にして前に比する者なく後に継ぐ者なし、と激賞している。

ところで、この金堂壁画の筆者については、寺伝では鳥仏師なりとし、世傳では高句麗僧曇微筆なり、と云われてきているのに対して、塚本は、然れども鳥仏師が数多の彫刻上に残したる所謂止利式の趣致は毫も此壁画の風趣と一致せざるのみならず、他に嘗て鳥仏師作と稱する絵画と存することを知らず、又曇微は紙墨碾磑を作りたるの外嘗て絵画を作りしを聞かず、と述べ、大いに疑問を呈している。金堂壁画をして、天智式の名画なり、とする説に対しては、余等の敢て問ふ所に非ざるも、としながら、塚本は、壁画に見られる文様の上から、希臘印度式であること、すなわち、天智式であることを示唆している。

此壁画中所々に散見せる紋様は明かに印度將來の者に

して 殊に彼の有名なるアッシリアの菊花紋を多しとす
此紋様は又堂内聖觀音（木像にして長八尺餘）の光背及
西の京葉師寺金堂藥師佛臺座に於て見る所と其趣を一に
す 又畫中佛像は其骨相純乎たるアレイアンにして其瀟
洒たる輕紗を透かして肌膚微に表はるゝは 熱帶國土裸
形神の風に近き者あり

このように、塚本が、金堂壁畫の画面に散見するアッシ
リア風の菊花文の上に、またアリアン人的風貌をもち、
印度風の輕紗をまとい肌を透かし見せている仏・菩薩像の
上に、天智式の表現を見ると、金堂建築をして推古式と
する塚本の法隆寺建築觀とどのように折合いをつけている
のであろうか、疑問なしとしないのである。

なお、塚本は、内陣の小壁に描かれている飛天図に対し
て、天人飛行の壁畫あり、畫風酷だ玉虫厨子蜜陀繪と相似
たり、と言っているのであるが、もしも塚本が、玉虫厨子
の繪畫をして推古式と目しているとするならば、金堂壁畫
を天智式と見る立場とは矛盾するようにも思われる。

次いで塚本は、玉虫厨子と天蓋についてそれぞれ章を立
てて論述しているが、その主眼とするところは、裝飾文様
にある。

まず玉虫厨子についてである。⁽⁵⁴⁾『古今目録抄』からの引
用をはじめ、玉虫厨子に関する概略は、とりわけ厨子繪の
主題については、その多くを小杉溫邨や黒川眞頼らの先達
に負っていることは十分に察せられるところであるが、塚
本自身も、玉虫厨子の建築的意匠については、専門の立場
から、左のように述べている。

此厨子は疑もなく推古朝時代の物也 其構造は甍付瓦
葺の宮殿にして 其棟軒瓦葺の形狀 垂木々舞等の配置
等 宛然當時の宮殿を看るが如く 其意匠の質朴にして
高逸なる實に推古朝建築の好模範たり

また、塚本は、玉虫厨子の全体の形狀については、小杉
溫邨氏の説であるとして、次のように述べている。

所謂内典の説に 須彌山頂上に宮殿樓閣あり 其内に
佛天住ませ給ふと云ふの意を取りて造れるものなるべし
その全体の形狀構造については、すでに奇古なりとし、
その細部については、熟視諦觀するに愈々其珍奇なると覺
ゆ、と述べており、就中殊に吾人の注意を惹く者として、
鴟尾と雲形肘木とを挙げてゐる。

もっとも鴟尾については、わずかに、隋唐の建築に多く
用ゆる所にして、推古朝以降奈良朝の頃より平安朝の始期

に於て盛に之を用ゐたり、とのみ述べて、和名抄と三代実録からの引用を充てるにとどまっている。そして、鴟尾の現今に存せるは、此厨子及唐招提寺金堂の二字あるのみ、として両者の図を掲げ、その形状を比較すると、はるかに玉虫厨子の方が優っている、と讃辞を呈している。

ちなみに、玉虫厨子の鴟尾について、最初の言説をなしたのは、やはり小杉温郁である。小杉は、明治二十一年の美術取調に参加した後、翌年の三月に皇典講究所において行われた講演「美術と歴史との関係」において、玉虫厨子の建築的意匠にもふれ、⁽⁵⁵⁾

また屋根は瓦ぶきに造り銅をふせ、棟に鴟尾を擧て、軒のめぐり殿内の構造、尤も精巧にして、いはゞ瓦ぶきの大廈の雛形にはあらざるかと思ふほどなりと述べている。

さらに小杉は、明治二十四年に創刊された『東洋美術』に四回にわたつて連載された「法隆寺金堂の玉蟲の厨子」の最終回に、玉虫厨子の鴟尾について言及し、こゝの玉蟲厨子の宮殿、屋上に造りたる希古は、實に驚くに堪えたるものなり、そもそも此鴟尾といふもの、と述べて、鴟尾の古事來歴について博覧考証を盡し、此の構造法は漢式なら

んか、但し三韓の傳を承けたるや明かなり、と評している。⁽⁵⁶⁾ 鴟尾に関する塚本の記述は、その多くを小杉に拠っているのみで差支えないであらう。

ちなみに小杉も塚本も、天平十九年の『大安寺伽藍緣起流記資財帳』には、舒明十一年(六三九)に建立された百濟大寺の金堂に石鴟尾が挙げられていたが、失火により九重塔とともに焼破された旨の記事が見られることを、和名抄の記事を引いて述べている。

ついで、玉虫厨子の雲形肘木についてであるが、文献考証の上ではエンサイクロペディアストぶりを發揮する黒川、小杉も、さすがに雲形肘木については発言を見ないが、石井も伊東もまた塚本も、法隆寺、法輪寺、法起寺の建築以外にはまったく類例を見ない特殊な構造体に対して、みな一様に、〈雲形肘木〉なる新語をもつて呼んでいるのは、もともと一級違いの石井、伊東、塚本らに日本建築学の手ほどきを教えた造家学科の木子清敬講師によつて与えられた名称なのであろうか。木子は明治二十二年に講義を担当して以来、夏には学生たちをつれて関西へ古建築の見学に出かけている。

もっとも、石井は、玉虫厨子の建築的意匠については、

わずかに『日本佛寺建築沿革略』において、四天王寺金堂の二重屋根（鍔葺という用語はまた使われていない）を論じた際に、

此二重形は他に決して見ざる所にして古形を保存せしによりて然るものか 法隆寺金堂にある玉虫の厨子の屋形も此形をなせり

とのみ、玉虫厨子の鍔葺の屋根を指摘しただけで、雲形肘木には着目していない。

また、伊東にしても、『法隆寺建築論』における玉虫厨子に関する言説は、すでに前述しておいたように、金堂内部の装飾を論じた際に、玉虫厨子の建築的意匠について、其屋根の形状、其鴟尾の制、其瓦の行基葺なる、其垂木の圓形なる、其組物の雲形なる（傍点筆者）、皆能く當時の建築式を示すの標品たらざるは無きなり、と諸特徴を羅列したなかで、雲形肘木についても言及されているだけである。その点で、左に見る塚本の玉虫厨子の雲形肘木に対する着目は、一步も二歩も前進している。⁽⁵⁸⁾

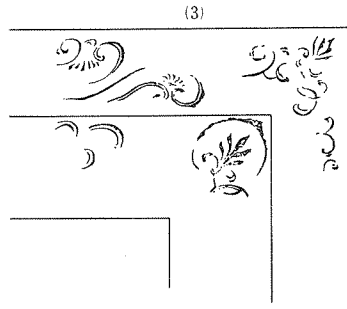
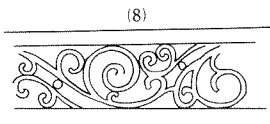
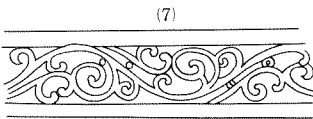
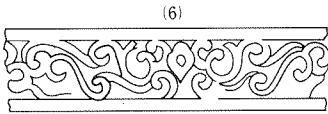
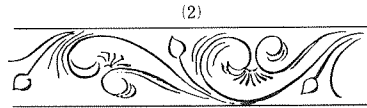
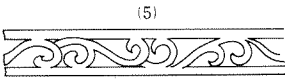
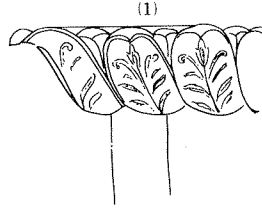
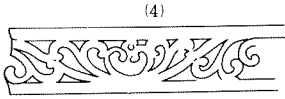
玉虫厨子は平に四個妻に三個の尾垂木を具ふ 其配置頗る奇にして孰れも中心に向へり 尾樺を支ふるには雲形肘木を以てす 其形状は金堂中門等に在る者と異なる

なし

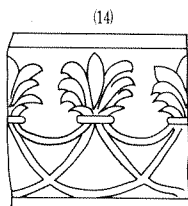
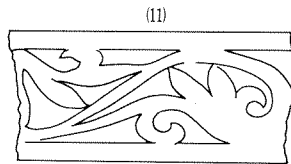
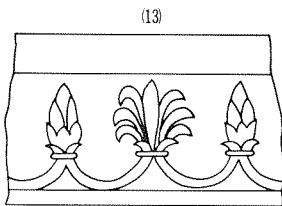
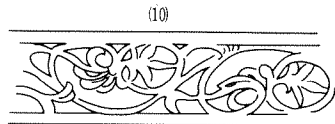
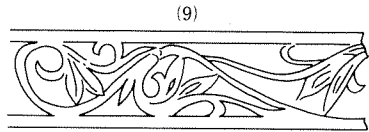
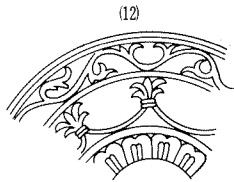
なお、ここで塚本が尾垂木について、其配置奇にして孰れも中心に向う、と言っているのは、正面から見るとよく判るように、平の四つの尾垂木のうちの内側の二つも、壁に直角ではなしにいくらか左右に開いており、また隅の尾垂木も斜の方向にのみ一本だけ挺出しており、全体として見ると、尾垂木は、放光のように放射状に挺出しているからである。それを塚本は、いずれも中心に向う、と見たのである。龕内本尊に向って、と言い直すと、平においてなぜ内側の尾垂木二つが左右に開いているのか、という實際建築にはありえない工藝品ならはこの意匠も理解されてくるはずであり、またそこが、實際建築である法隆寺の金堂・塔・中門の雲形肘木とのすこぶる大きな差違の一つであり、少くとも玉虫厨子の建築的意匠についての考察は、それら両者の雲形肘木の異同を問うことから始まるものといえよう。

ところで、塚本の法隆寺建築論において、その本領ともいうべき、もつとも画期的な論説の一つは、玉虫厨子の装飾文様に関する、いわば西方起源系統論であり、その各系統の展開を、挿図（別表1）を示して、左のごとく論述し

〔別表1〕



- (1) (2) (3) 玉虫厨子須彌座密陀絵模様
 (12) 法隆寺四十八体仏背光
 (13) アツシリア国コルサバッド古蹟釉瓦の模様
 (4) (5) (6) (7) (8) 玉虫厨子須彌座金物模様
 (9) (10) 法隆寺金銅長幡の模様
 (11) 法隆寺金堂聖観音手腕飾



ている。⁽⁵⁹⁾

玉虫厨子に於て最奇とす可きは、其須彌坐上下の蓮華形繰形の上に印せる模様にして、純乎たるアツシリア式なり。又足付臺座の平ら面には整形の希臘忍冬あり、破風貫方立階段の見付等の金具にはビザンチン風の華線を見る。其形状全く彼の鳥佛師作と稱する御物四十八牀佛（金銅佛にして法隆寺獻納品の内）金銅長幡の邊縁（聖德太子橋寺に於て法華勝鬘經御講讀の時用ゐし物）及金銅板佛周圍の唐草と相以たり。

ビザンチン式は羅馬の末代に行はれたる者なるを以て其法隆寺に現はるゝは頗る疑訝の感なき能はずと雖ども元來此式はクラシック式に加ふるに東洋固有の意匠を以てしたる者なれば、クラシック式の起源地たる小亜細亞地方の様式か印度波斯等の地方を経て我國に入りし者と偶然冥合するは、豈に異しむに足ざるなり。ひとり玉虫厨子のみならず、法隆寺に蔵されているいわゆる推古式の仏像や金銅幡、あるいは金銅押出仏に見られる植物文様、すなわち、唐草文様をそれぞれ検出しての比較考証である点は、大いに注目されてよい。

また、金堂天蓋についても、『古今目録抄』の天蓋の項

を引いて考証するとともに、塚本自身の見た天蓋の裝飾について、こう述べている。⁽⁶⁰⁾

天蓋全牀の裝飾は、全く堂内橋夫人持佛堂軒先に同じく軒蛇腹（コーニス）には、朱白二色より成れる唐草を描き、其下には紅緑二種の對照色を以て粉飾せる列鱗形のフリーズあり、鱗の相列すること上下二層にして毎鱗施すに菊花紋を以てす。鱗下には赤色の三角板あり、板面一様に白紋を印す。板下垂直線の終る處には希臘風の波紋を彫り、朱を以て之を塗る。天蓋内の天井は直線に折上げたる組入天井にして、其配色形状全く母屋の天井に同じく、白地に紅緑二色を配して六辨の返花及蓮形の唐草を描き（反花は格間、蓮形唐草は折上げの處に在り）、格縁は總て朱を塗れり。

ここで塚本が言う、金堂の天蓋と橋夫人厨子の天蓋との裝飾の相似もさることながら、天蓋の内側の折上げ天井と母屋、すなわち金堂自体と天井との裝飾法の相似が指摘されていることも、すこぶる重要である。金堂の天蓋と橋夫人厨子の天蓋、加えて金堂自体の天井との、それらの三つの構造と裝飾法がいちじるしく相似していることは、それらの様式年代にほとんど差違がないことを物語ることにな

るからである。

さらに塚本は、推古朝時代の裝飾についてアッシリア等西域の趣味の存在せる例として、法隆寺藏の有名な四天王紋錦旗を挙げている。すなわち、武者は其頭に翼冠を戴き、其乗騎にも亦翼あり、また推古天皇御褥の蜀江錦の模様にも、亦有翼の馬形あり、と述べている。ベガサスに、塚本はアッシリア式の夢のかがよいを見たのである。

こうして塚本は、余が上来述べたる所を概括すれば、法隆寺は推古式建築物にして、其裝飾は全く支那固有の式に印度西域の風を参加したる者なり、故に直ちに之を以て希臘式を祖述する者なりと稱するは頗る其當を得ずと云ふに在り、と結び、暗に伊東説を批判している。なお、塚本がいう西域には、アッシリア地方、すなわちサーサーン朝ペルシヤがふくまれていることは、すでに見てきたところである。

四 明治三十一年における伊東忠太の紀要

「法隆寺建築論」と玉虫厨子に関する言説

1 建築裝飾に対する新たな関心

伊東は、明治二十六年に演説した「法隆寺建築論」を『建築雑誌』第八十三号に寄稿した後、五年を経て、明治三十一年（一八九七）四月に刊行された『東京帝國大学紀要』工科第壹冊第壹號に、同じく「法隆寺建築論」と題する学位請求論文を載せている。⁽⁶¹⁾（以下「紀要」論文と略称する）。

その内容は、前回の論文に比べると、法隆寺西院伽藍の中門・塔婆・金堂の三建築を推古式と見做す点においてはまったく変るところはなく、各論の中門建築説、塔婆建築説、および金堂建築説の三篇は、項目といい、文章といい、ほとんど差違が認められないのであるが、新たに、金堂内部、講堂建築説、廻廊建築論、鐘樓建築説、經藏建築説、自餘の諸宇、法隆寺建築の真相の諸篇を加え、じつに

緒言以下十三篇に及ぶ、まさしく法隆寺西院伽藍の主要建築のすべてを網羅する一大研究となつてゐる。

なかでも、前論文に比べてもつとも注目されるのは、新たに設けられた金堂内部篇であり、玉虫厨子、諸佛像、橋夫人念持佛厨子、壁画、の四章で構成されているが、そのうち、いちばん詳細を極めてゐるのは、玉虫厨子に関する章であり、雲形肘木をはじめとする建築意匠の各細部に、さらに鈔金具、密陀畫、密陀摸様、を加えて、じつに十四節の多岐に及んでいる。前論文においても、金堂建築説のなかで、内外裝飾の一節を設けて壁画と玉虫厨子にはふれてはゐるものの、玉虫厨子については、吾人の尤も珍奇とするものは彼の玉虫厨子に若しはなし、と述べてゐるばかりで、橋夫人厨子については、名称すらも記されてはゐなかつたことを思えば、その間に五年の経過があるとはいへ、前論文と比べて格段の相違があると言わざるをえないのである。伊東は、金堂内部の玉虫厨子や橋夫人厨子、あるいは壁画などを、とくにここで法隆寺建築との関わりにおいて、とくに新たに一篇を設けて取り上げる理由を、次のように述べてゐる。⁶²⁾

金堂ノ内部ニ就テハ吾人ノ言ハント欲スル所甚タ多

シ、而シテ其特ニ論セサルヘカラサルモノハ即ハチ玉虫厨子、諸佛像、橋夫人念持佛厨子、及壁画ニシテ皆ナ法隆寺伽藍建築ト直接或ハ間接ノ關係を有セリ、是故ニ此篇ハ主トシテ彫刻繪畫摸様ニ就テ之ヲ論ス、蓋シ彫刻繪畫ノ術ハ建築ト尤モ親密ナル關係ヲ有スル以テ、獨リ建築ヲ論シテ彫刻繪畫ニ及ホサ、レバ以テ當代美術ノ眞相ヲ知ルニ足ラス、亦以テ建築ノ眞相ヲ發揮スルニ足ラサレハナリ、但タ余ハ茲ニ彫刻繪畫ノ眞相ヲ看破シテ美醜ヲ論斷スルニ非スシテ、却テ其眞正ノ意義に於ケル建築術ノ範圍内ニ屬スヘキ部分ヲ論述セント欲スルナリ

では、ここで伊東の言う、建築術ノ範圍内ニ屬スヘキ部分、とは何か。玉虫厨子に就いては、もともと仏殿の形象を模した雛型であつてみればその建築意匠そのものが、伊東の言う建築術と直接に関わつてゐることは当然であるが、なぜ、金堂内の諸仏像、あるいは天蓋をも建築術の範圍内に属すべきものとして論述するか、については必ずしもその理由は明確ではない。しかし、壁画については、内陣および外陣ともに壁自体が建築のすこぶる主要な部分であつてみれば当然ではあるが、壁自体の構造あるいは材料にとどまらず壁面に描かれた絵画、とりわけ裝飾文様を、

建築術の範囲内として取り上げることになったのは、当然のことながら、それらが建築装飾の主役をなしているからである。それは法隆寺金堂の内陣・外陣の壁面はもとより、玉虫厨子の宮殿および須弥座の壁面についても同様である。

すなわち、伊東が新たに設けた、金堂内部の篇において、特筆すべきいちじるしい特色は、まず第一には、玉虫厨子、橘夫人厨子、天蓋、および壁画のそれぞれの章において、建築装飾としての絵画、とりわけ装飾文様がきわめて精密に観察されていることである。それは、諸佛像の章においても同様であり、文様の探索は、金堂の釈迦・葉師兩本尊および四天王像の光背、さらには聖徳太子四天王紋旗にまで及んでいる。玉虫厨子に関する言説については後述するとして、ここでは、まず金堂内部装飾の最たる壁画について、伊東の提起するところに耳を傾けておきたい。

2 金堂壁画のガンダーラ式仏像表現

まず、伊東は、金堂壁画について論述するにあたって、それまで見落されてきた内陣柱上の壁画の「飛天図」の存在を指摘している。幽暗な金堂内であってみれば、内部の

建築構造を精細に調査することなしにはえられない建築家の観察である点が、とりわけ注目されるのである。⁽⁶³⁾

外陣頭貫上ノ壁画ハ全ク白堊ヲ以テ塗抹サレ、今日之ヲ觀ルルヲ得ズ、内陣天井下部ニハ天人ト雲トヲ畫ケリ、其描法色彩等全ク外陣の壁画ニ均シク其天衣ノ秀麗美妙ノ曲線ヨリ成ルル猶ホ玉虫厨子ノ密陀畫ニ於ケルモノ、如ク、又外陣ノ壁画ニ於ケルモノニ似タルモノアリ、然レ凡世間ノ法隆寺壁画ヲ説クモノ、常ニ彼ノ外陣ニ於ケル大作ノミ議論シテ未タ曾テ比ノ天人ノ畫ニ及フモノアルヲ聞カス、余ハ寧口世人ノ之ヲ觀ルル極メテ輕キカ如キヲ怪メリ

もつとも、この天人図の存在については、すでに塚本靖も指摘しているところであり、⁽⁶⁴⁾画風はなほだ玉虫厨子密陀繪と相似たり、と述べているので、伊東の創見とは言い難い。なお、ここで塚本といえは、伊東が、とくに新たに金堂内部の篇を設けることになるのも、また建築装飾、とりわけ装飾文様にいちじるしく関心を抱くようになるのも、もとはといえは、直接には塚本の明治二十七年の「法隆寺建築装飾論」に刺激され、開眼されるところ少なくともなかつたように思われるのである。すでに前章で述べたよう

に、塚本は、とくに金堂なる篇を設けて、金堂外部裝飾、金堂内部裝飾、玉虫厨子、天蓋の四つの章に分け、金堂内部裝飾の章において壁画について論述している。やはり伊東に対する塚本の影響なしとしないのであるが、この点については、伊東自身はまったく触れるところがない。

かくして伊東は、次に金堂外陣の四大壁の浄土図と八小壁の菩薩図の壁面の所在位置の説明に及ぶのであるが、各壁面の図相については、⁽⁶⁵⁾此ノ壁畫ハ弘法大師密教甚深ノ法則ヲ傳フルノ以前ニアルヲ以テ所謂儀軌ニ準ハズ、是ノ故ニ其佛像ノ何タルヲ知シム、として、一切論究することを避けており、伊東の関心がひたすら壁画に描かれた仏像の容貌姿勢、あるいは裝飾文様の様式の源流が奈辺にあるか、その探究にあることを示している。

其容貌姿勢ノ純然タル西域式(爰ニ所謂西域式トハ主トシテ「ガンダラ」式ヲ云フ)ニシテ、其紋様ノ一部ハ印度式ヲ保チ一部ハ希臘ノ様式ヲ存スル至リテハ歴然東西連絡ノ證據ヲ示シ、吾人ヲシテ深く壁畫ノ性質ヲ探リ、其起原ニ溯リテ東西交通ノ歴史ヲ明ニセント欲スルノ好奇心ヲ起サシム

伊東は、まず壁画に描かれた諸仏像の容貌、姿勢、衣裳

について観察した結果⁽⁶⁶⁾、容貌については、諸佛の容貌ハ顔面廣濶ニシテ蛾眉鳳眼、下頤隆起セリ、としてそれを西域民族と断じ、支那人の理想ヲ加味シタル西域人種トシテ見ルベキモノナラン、とし、また姿勢については、軀幹長大ニシテ、其四肢ノ比例、其腰部ノ形状、其他各部ノ權衡ハ寧ろ「アリアン」民族ニ近ク、と述べ、吾人ハ亦壁畫ノ佛像が彼ノ南都薬師寺ノ三尊佛ト其姿勢ヲ均シフスル「」ヲ觀察スベシ、と言ひ、さらに衣裳については、佛像ハ殆ト凡テ上半身裸躰ニシテ左肩ヨリ右腋下ニ袈裟ヲ懸ケ、腰下ニ極メテ薄クシテ長サ足ニ達スル裾ヲ纏ヒ、更ニ其上ニ短キ腰衣ヲ纏ヒ寶石ヲ以テ飾リタル帯ヲ着ケタリ、斯ノ如キ服装ハ素ト熱帯地方に適スベキ制ニシテ、と述べて印度に胚胎するとしながらも、之亦決シテ純粹ノ印度服裝ニ非ズ、想フニ均シク之支那人ノ理想ヲ加味セル西域式ナラザル可ラザルナリ、と述べている。

こうして、伊東は、金堂壁画に描かれている仏像が、推古式である鳥仏師作の仏像に比べてまったく類似するところがないことを、すなわち、その根底より別種のものであることを指摘するとともに、かえって薬師寺三尊および橘夫人厨子における密陀画に酷似していることを認めざるを

えない、とする。そしてその源流については、ガンダーラ
の希臘印度式であることを示唆している。⁶⁷⁾

彼ノ健陀羅の舊土ナル「ペシャウエル」附近ニ存在ス
ル希臘印度式ノ佛像中ニ我カ壁畫ニ於ケル佛像ト殆ント
符節ヲ合スルカ如キモノアリ、其年代ハ西洋紀元第五世
紀ヨリ以前ノモノナルベシト云フ、其容貌ノ圓滿ニシテ
殆ント全ク希臘人ノ骨相ヲ有スル、其両脚ヲ交叉シテ胡
坐セル、其右袒シテ全ク右腕ヲ露シタル、其体格ノ長大
ニシテ各部ノ比例ノ調ヘル、其半開ノ蓮花上ニ胡坐セ
ル、實ニ之レ希臘印度ノ形式ノ成熟セルモノト謂フベ
シ、余ハ我壁畫ニ於テ見ル所ノ佛像カ這種ノ佛像ト必ス
ヤ親密ナル關係ヲ有スヘキトヲ信ジ、併セテ壁畫ノ性質
ガ推古式ニ遠クシテ天智式ニ近キトヲ示スベキ一材料ナ
リト思惟スルナリ

ここで、伊東は、金堂壁畫の性質が、推古式に遠く、天
智式に近いことを、すなわち今日にいう白鳳様式に近いこ
とを指摘している点は、大いに注目されてよい。

3 金堂壁畫の裝飾文様とその分類

次いで、伊東は、金堂壁畫には甚だ多種類の模様が、

仏・菩薩の衣裳、台座、椅子、天蓋にあり、またそのほか
宝冠、器具等にも散在しており、その形状たるやすこぶる
珍奇なるものであり、多くはまったく他に類例をみない、
としてゐる。そしてそれらの起源について、こう述べてい
る。⁶⁸⁾

其起原ニ關シテハ或ハ印度ニ歸スベキモノアリ、或ハ
西域ニ歸スベキモノアリ、或ハ埃及ト酷肖シ或ハ希臘ト
類似スルモノアリ、之ヲ要スルニ各種ノ模様ハ一モ支那
ノ創意を加ヘズ本邦ノ改竄ヲ經ザルモノニシテ、純然タ
ル異邦ノ様式ヲ示スモノト謂ヒテ可ナリ

続いて、色彩について述べ、極メテ鮮麗ナリシトハ疑フ
可ラス、として、仏像の輪廓は赤色ないし褐色でままた黒色
を用い、賦彩としては、赤と緑がもつとも多く、黄も少な
くなく、要するに原色本位であり、間色を用いること極め
て少ないことを指摘している。また雲綯彩色も、賞用さ
れ、到る所に好果を呈しているのを見る、としている。

このように、伊東の金堂壁畫に対する觀察はすこぶる細
やかであるが、その圧巻は、なんとといっても壁畫の裝飾文
様の分類である。⁶⁹⁾ すなわち、

壁畫ノ模様ハ大別シテ左ノ二種トナストヲ得、

(甲) 植物ヨリ脱化シタルモノ

(乙) 幾何學的ノモノ

植物ヨリ脱化セルモノニ五種ノ起源アリ、即チ左ノ如

シ

(イ) 蓮

(ロ) 忍冬

(ハ) アカンサス

(ニ) 鳶尾

(ホ) 唐草

幾何學的ノ模様ニ左ノ三種アリ

(イ) 寶珠及其變形

(ロ) 臺座模様

(ハ) 自餘ノ模様

に分類し、これを附図に照らして、順次に解説している。

その全文を掲げるのは、すこぶる煩瑣にわたるので、主要な点のみを引いておきたい。

まず、蓮についてであるが、蓮ハ印度ニ於テ尤モ賞用セラル、模様ニシテ壁畫ノ上ニ於テ甚多ク之ヲ見ル、其ノ菩薩ノ手ニセル寫生的ノ蓮ハ往々非常ニ想像的ナルモノアリ各自其意匠ヲ均フセズ、として、さらに仏画の裝飾文様の

主役である蓮の模様を次の十種類に分けている。

すなわち、(一)は莖および葉が写生的な蓮とは大いに異なるものありとし、また花についても半開の花や最上部にある想像上の花は、すこぶる埃及の様式に似たるものあり、としている。(二)は模様化した蓮で、單純である。(三)は火煙のごときを加へたるもの。(四)は弁上に雲網の彩色を施したるもの。(五)は寶珠を納れたるもの。(六)は寶珠と鳶尾の變形を適用したもの。(七)は蓮弁を以て天蓋となし、これに忍冬様の模様を施したもの。(八)は鳶尾の變形を以て弁上に画いたもの。(九)はほとんど写生的の鳶尾を画いたもの。(十)は複雑な鳶尾の變形を画いたもの、である。

ここで、鳶尾の變形という説明が頻出するが、伊東は、鳶尾花の項で、鳶尾ハ素ト印度及波斯地方ノ模様ナリ、其原形及獨立ノ應用ハ之ヲ壁畫ニ見ルト得ズト雖モ其變形ハ常ニ蓮辨ノ上ニ印セラレテ各所散在ス、と解説している。また、忍冬様の模様を施したもの、という言葉もみられるが、忍冬の項で、彼ノ諸佛像及玉蟲厨子等ニ賞用サレタル忍冬ハ壁畫ニ於テ完全に且ツ獨立シタル模様ヲ呈セズ、と解説しているが、推古式の諸佛像や玉虫厨子にその氾濫を見せていた忍冬文様のいちじるしい衰退ぶりは、金

堂壁画の系統や年代を考へる上で、すこぶる重要である。

そのほかに、植物ヨリ脱化セルモノとしてアカンサスの花が拵がつているが、アカンサスについては、壁画には欧州「クラシック」式に於テ見ルガ如キ完全ナル「アカンサス」ヲ発見セズ、として、いわば擬似アカンサスについて述べ、しかも要スルニ西域ノ創意ニ由テ成レル假想的ノ植物ナルベク其「アカンサス」トノ關係ニ至リテハ吾人之ヲ認ムルニ苦シム、と疑念を呈している。

他方、幾何学的模様については、その解説はすこぶる簡略であり、宝珠についても、寶珠ハ原ト印度人ガ衣服ノ裝飾トシテ賞用スルモノニシテ兼テ各種の物鉢ニ裝飾模様トシテ之ヲ應用セリ、印度内地ノ佛教建築例セバ、堵波、伽藍等ノ磚上ニモ好ンデ之ヲ用井タルノ事實ヲ認ム、今我カ壁画ノ中ニ於テハ佛像ノ冠、頭環、腕環等ノ裝飾トシテ用井ラレ兼テ衣裳ノ紋様トナリ、其種類極メテ多シ、と述べているのみである。また、台座模様についても、臺座模様モ亦印度ニ胚胎スルモノナルベシ、と述べている。なお、そのほかに、自餘ノ幾何学的模様ニ數種アリ、として、斜方形系統、直方形系統、斑點系統、星形系統の四種に分け、別に台座の脚の上部の線形に言及し、一種異様ニシテ

後世本邦ニ普及セル「格座間」及之ニ類似スル曲線形ノ源ヲ為セリ、と觀察の眼を行届かせている。

こうして、伊東は、壁画ニ於ケル模様ト諸佛像及玉蟲厨子ニ於ケル模様トノ比較研究ハ頗ル趣味アリ、として、次のように結んでいるのは、裝飾文様の上から見た金堂壁画の年代觀を示すものとして、すこぶる貴重である。

余ハ玉蟲厨子、諸佛像、天蓋、古瓦等ニ於テ一種ノ唐草模様ノ賞用セラル、ヲ觀察セリ、コノ唐草模様ハ實ニ推古式ノ特色トシテ見ルヲ得ベキモノナリシナリ、而シテ今ヤ斯ノ模様ハ殆ンド壁画ノ上ニ見ル所ナク壁画ニ於ケル模様ノ性質ハ却テ藥師寺三尊佛ノ須彌臺及橘夫人厨子ニ於ケルモノニ類以セリ、余ハ斯ノ事實ヲ以テ壁画ノ性質ハ推古式ニ遠クシテ天智式ニ近キトヲ示スベキ一好材料ト思惟スルナリ

ここで、伊東は、壁画に描かれている裝飾文様の上から見ても、金堂壁画の年代は、天智式に近いことを明言しているのである。

4 壁画から見た法隆寺金堂の年代

このように、伊東は、金堂壁画に描かれている佛像の鉢

格、姿勢、容貌から、あるいは裝飾文様の上から、それぞれ仔細に観察するときには、いずれも、壁画ノ性質ハ推古式ニ遠クシテ天智式ニ近キ⁽⁷⁰⁾ヲ確信セザル、をえなくなつたのである。そこで、伊東は、金堂の年代についても、こう述べている。

今姑ラク金堂ニ關スル傳來ヲ度外ニ置キ、其天智ノ朝ニ一タヒ焼失シテ和銅年中ニ再建セラレタルノ記録ヲ忘レ、其末々曾テ火災ニ罹ラズト云フノ口碑ヲ捨テ、虚心ヲ以テ壁画ノ性質ヲ研究シ、ソノ年代ヲ定ムルハ則ハチ最モ興味アル事業ニシテ、彼ノ傳記此ノ口碑ノ如キハ之由テ自ラ解釋セラルベキ簡易ナル問題ナリトス、若シ此ノ口碑ノ彼ノ記録ヲ以テ金科玉條トナシ、之ニ由テ壁畫等諸般ノ事物ノ年代ヲ想像シ、美術沿革ノ系統ヲ作ラント欲スルガ如キハ則チ猶ホ木ニ縁リテ魚ヲ求ムルガ如シ、如何ゾ夫レ能ク正鵠ヲ得ベケンヤ

ここで、伊東は、五年前の「法隆寺建築論」において、いち早く掲げた古老の伝、すなわち、天智紀九年の条にいう法隆寺罹災について、もともと日本書紀に拠る原本には二本あり、その一つは法隆寺火災ありと記し、もう一つは幸降寺火災ありと記してあつたが、幸降寺は法隆寺の末寺

であつたので、本来は末寺の幸降寺の火災であつたにも拘らず、もう一本は、法隆寺と伝えたのである、という法隆寺側から起こつた古老の伝をも、はつきり退ける姿勢を示しているのである。当時の伊東は、法隆寺の中門・塔婆・金堂の三建築をして、同時代の建築と見なし、これを同一の流派とし、余は断じて推古派流と名しるに躊躇せざるなり、と断じて、法隆寺のまだ曾テ火災に罹らすと云ふもの、或は其和銅年代の再建に係ると云ふものに比して近からんか、と述べ、非再建論に加擔する意嚮を示していたのである。

その当時に比べると、伊東の法隆寺年代観は、金堂壁画の觀察をとおして、かなり弾力的であり、また余裕をもつて対処する姿勢を示していることが伺われるのである。

若シ金堂末々曾テ焼失セズト認ムルトキハ、壁畫ハ金堂建築成り数十年ノ後之ヲ畫キタリト云フニ何等ノ妨ナク、若シ又金堂天智ノ代ニ燒ケタリト認ムルトキハ、金堂ハ直チニ再建セラレ、年ヲ越ヘテ成功シ、壁畫ハ直チニ畫カレタリト云フニ何等ニ障害ナカルベシ

そう云いながらも、伊東は、和銅再建の説に對しては、證明スヘキ有形ノ材料ノ欠ケタルハ素ヨリ論ヲ俟タス、之

ヲ傳記ニ徴スルモ、七大寺年表ニ和銅ノ造作ヲ記セル外、
彼ノ色葉字類抄ナル一冊子ニ「和銅年中造立縁起」云々ノ
語アルニ過キサルナリ、とすこぶる懷疑的である。

かくして、伊東は、⁽⁷¹⁾こう結論する。

之ヲ要スルニ吾人ハ假令法隆寺伽藍ノ天智ノ朝ニ一タ
ヒ灰燼ニ帰シタルトモ信スヘシトルスルモ、其再建ノ和
銅年間ニ在リシトモ信スヘキ理由ノ薄弱ナルトモ認ムル
ナリ、又之カ壁畫ヲ以テ吾人ノ所謂天智式ノ前驅ナリト
推論スル所以ニシテ、之レ亦毫モ傳記正史ト衝突セザル
所以ナリ

ここで、伊東が、金堂壁画をして天智式、すなわち、今
日に言う白鳳様式としながらも、これを天智式の前驅なり
と位置づけているのは、薬師寺三尊仏および橘夫人厨子の
須彌座に描かれている密陀画との比較からである。⁽⁷²⁾

夫レ吾人ハ橘夫人ノ厨子ト壁畫トヲ比較スルニ厨子ニ
於ケル密陀畫ハ甚タ壁畫ニ似ルト雖モ已ニ多少西域ノ趣
味ヲ脱却シテ日本化セルノ痕跡アリ、其唐草模様ヲ見レ
バ正ニ壁畫ニ於ケルモノト薬師寺三尊佛ノ須彌壇ニ於ケ
ルモノトノ中間ニ居ル、果セル哉コノ厨子吾人ノ所謂天
智式成熟ノ年代ニ屬スルモノニシテ畧ホ薬師寺ノ三尊佛

ト相均シキモ決シテ之ヨリ後ル、モノニアラズ、而シテ
壁畫ハ決シテ此ノ厨子ト同時ニ成ルトモ得ルモノニ非
ズ、必ラズヤ遙カニ之ニ先ツモノナラザルベカラズ
このように、橘夫人厨子の須彌座絵をして、天智式の、
すなわち白鳳様式の成熟期の年代と目するならば、金堂壁
画の年代は、必ずやこれより、遙かに先立つものと断ぜざ
るをえない、と云うのである。

5 玉虫厨子に関する言説

——建築的意匠と裝飾文様——

では、最後に玉虫厨子についてである。

なぜ、玉虫厨子が、法隆寺建築の研究の上で重要な
か。伊東は、まず、玉虫厨子について論述するにあつ
て、次のように述べている。⁽⁷³⁾

法隆寺建築中彼ノ金堂中門塔婆ノ三字カ相伴フテ共ニ
推古式ト名クヘキ流派ニ歸スヘキハ其外觀先ツ之ヲ表示
スト雖モ然レ凡亦別ニ之カ憑據ノ確然タルモノアルニ非
サレハ吾人ハ容易ニ斯ノ斷定ヲ下スヲ得サルベシ、是時
ニ當テ能ク之カ憑據トナリ以テ吾人ノ判斷ヲシテ確實ナ
ラシムルノハ即チ吾人ノ玉虫厨子獨リ之アルノミ、之レ

吾人カ法隆寺ヲ論スルニ當リテ必ス玉蟲厨子ヲ逸スベカラサル所以ナリ

すなわち、伊東は、それまで法隆寺建築のうち、金堂・中門・塔については、ともに推古式と目されてきたが、とくに依拠する確実なものがあつてのことではない。その際、玉虫厨子のみが判断の拠りどころとなるのである。それ故、法隆寺を論ずるにあつては、玉虫厨子を逸することはできない、と明言しているのである。

こうして、伊東は、新たな金堂内部篇の冒頭に、玉虫厨子のために一章を設け、緒言に始まり、(一)総説、(二)「プラン」及び「エレヴェーション」、(三)土壇、(四)柱及び大斗、(五)雲形肘木、(六)「尾榑木」及び「丸桁」、「丸桁受肘木」、(七)「軒」及び「垂木」、(八)「屋蓋」、(九)「妻飾」及び「破風」、(十)「鴟尾」、(十一)飾金具、(十二)密陀畫、(十三)密陀模様、(十四)結論、の各節に分ちて、詳述する。

これを五年前の伊東の「法隆寺建築論」の際の、玉虫厨子に関する言説に比べれば、まさしく昔日の観なしとしなのである。すなわち、前論文においては、⁽⁷⁴⁾

内陣土壇の上に數多の佛像あり、而して吾人の尤も珍奇とするものは彼の玉虫厨子に若くはなし、其屋根の形

狀、其鴟尾の制、其瓦の行基葺なる、其垂木の圓形なる其組物の雲形なる、皆能く當時の建築式を示すの標本ならざるは無きなり。

と述べるにとどまつている。

さて、まず総説において、伊東は、玉虫厨子の構造を、「宮殿」、「須彌座」、「臺座」の三部より成るとして、実測によつて、それぞれの寸法を掲げている。すなわち、全高七尺七寸、宮殿は鴟尾の上端まで加えて高さ三尺五寸七分、須彌座は高さ三尺一寸二分五厘、臺座は高さ一尺、廣さは四尺五寸四分。そして、全体のプロポーションについて、一見其高キニ失スルト、「須彌座」及「臺座」ノ「宮殿」ニ比シテ大ニ過クルコトヲ觀察スヘキナリ、とししている。しかし、なぜそうなのか、については触れるところがない。

ついで、総説において、文献上の考証については、すでに屢々考古家の筆を勞セリ、として、明治二十九年(二八九六)の三月に、国学者の小杉楳邨が『國華』第七十八号に寄稿した「法隆寺金堂に置く所玉蟲の厨子」にこれを詳論して、ほとんど餘蘊なし、と述べ、小杉に倣つて『古今目録抄』からの引用を掲げている。そしてとくに以玉蟲

羽⁽⁷⁵⁾以銅彫透唐艸下臥⁽⁷⁶⁾之、を引いて、明治二十一年十二月、小杉楳邨氏ハ金具ノ間ニ玉蟲ノ羽ノ遺存セルヲ発見シタリト云フ、と言ひ副えている。この玉蟲の翅発見の感動を報ずる一文は、前掲の小杉論文の圧巻であり、すでに本稿においても、「その一 明治初期の國學者による玉蟲厨子の研究」において、紹介したところである。ちなみに、玉蟲の翅飾については、伊東の前論文においても、また、塚本の「法隆寺建築裝飾論」においても、それまでまったく触れるところがなかったのである。

さらに、伊東は、とくに小杉の引く『白拍子記』からの、東面ニ玉蟲葺ル玉殿アリ、推古天皇御厨子也、金銅ノ彌陀三尊ヲ本尊ニ安置シ給ヒケリ、を引用して、

之ヲ要スルニ玉蟲厨子ハ推古ノ朝ノ製作物ニシテ始メ橘寺ニ之ヲ安置シ、橘寺滅滅ノ際法隆寺金堂内ニ移シタルモノナル⁽⁷⁷⁾甚タ明瞭ナリ、而シテ其何レノ時ニ法隆寺ニ移セルヤ未タ確然タル考證ヲ得スト雖モ、若シ法隆寺伽藍ヲ以テ一タヒ天智ノ朝ニ烏有ニ歸シ和銅年間之ヲ再建セルモノナリト認定スルハ此ノ蓋シ和銅再建ノ後ニ移サレタルモノナラサルヘカラスとして⁽⁷⁸⁾いる。

なお、玉蟲厨子の法隆寺移座年代を推考して、玉蟲厨子の建築的意匠については、まず、全体の印象について、こう述べている。⁽⁷⁹⁾

「宮殿」ハ其手法殆ソント法隆寺金堂以下ノ各宇ト相符合シ、其工作亦精巧ニシテ一見當時建築ノ模倣ニ接スル思アルナリ、憶フニ當時ノ工人其全力ヲ茲ニ注キテ以テ經營製作スル所アリシナラン、「須彌座」ハ其「プロポーシヨン」高キニ失スルカ如ク、其上下ニ施セル蓮形ノ「線形」ハ其壁面トノ連続ニ妥當ナラサル所アリ、「臺座」亦タ未タ其「プロポーシヨン」ヲ得タルモノニ非ス、之ヲ要スルニ上部ノ精細ト下部ノ粗大トハ尤モ急激ナル衝突ヲ致シ、各部ニ於ケル連絡ハ曲線形ノ「線形」ニヨリ⁽⁸⁰⁾ナクシテ常ニ硬固ナル段階様ノ直線形ニ由ルハ其尤モ特質トシテ吾人ノ視覺ニ感スル所ナリここで、すこぶる興味をおぼえるのは、玉蟲厨子の全体について、その構造を、実測による寸法、だけで示すのではなく、視覺ニ感スル印象を、すなわち、なによりもプロポーシヨンの好悪を指摘している点である。こうして宮殿を精細、須彌座と台座を粗大と見て、吾人ハ「臺座」ト「須彌座」トニ就テハ深ク論究セスシテ可ナリ、乞フ以下

「宮殿」ニ就テ其形式ヲ討究セン、と述べている。

なお、伊東が、須弥座の上下に装されている仰蓮・伏蓮の繰形について、その壁画との連絡が妥当でない、と指摘しているのは、たしかに視覚的には当たっている。しかし、厨子全体の形態を、図像学的にとらえるときには、すなわち、釈迦仏の坐す切利天宮を戴く巨大な須弥山の姿を表わしたものと見るときには、こうしたプロポーションの悪い、いわばきのこ状の形態も表現上はありうるように思われる。蓮の繰形また然りである。須弥座を、単なる仏殿安置のための台とのみ見てはならないのである。須弥座背面図の「須彌山」の異形の山岳とその頂上の切利天宮の表現と照応させて見る必要がありはしないであらうか。

では、玉虫厨子の宮殿についてである。まず、プランについては、宮殿ノ「プラン」ハ直角形ニシテ一間四面ナリ、其廣サ柱眞々一尺五寸八分五厘、其幅柱眞々一尺七分アリ、正面柱間ニ垂木十五支ヲ分チ、側面柱間二十一支ヲ分チ、「軒ノ出」ハ正面側面共ニ八支ヲ数フ、と木割による数値をもつて示し、其全体略ホ整ヒテ乱レス、と評している。かくして、蓋シ此ノ「宮殿」ノ物タル始メヨリ一箇ノ厨子トシテ經營スル所アリ、未タ曾テ眞正ノ殿堂ヲ直寫

スルノ意ヲ以テセルニ非ス、と断わっている。

ついで宮殿細部の建築的意匠についてであるが、観察はすこぶる精細をきわめ、それぞれ実測による数値が示されているが、ここでは、玉虫厨子にとつてきわめて特色のある細部についてのみ、その観察するところを見ておきたい。

まず、柱についてであるが、「柱」ハ正方形ニシテ一邊ノ長サ八分五厘、以テ其比較的ニ稍細キヲ觀察スヘシ、と述べているのは、法隆寺金堂の柱がエンタシスであり、しかも、はなはだ胴太いの比べるときには、すこぶる重要である。また、その柱上の「大斗」についても、形が一種極めて異様であるとして、雷ニ「皿斗」ノ一種ヲ備フルノミナラス、其全鉢ノ輪廓直角形ヲナサシテ却テ上部ニ開展シ下部ニ縮小ス、と皿斗の側面が内に転んでいることを指摘しているのは、これまた法隆寺金堂の特徴とされている皿斗の側面が垂直であることに比べて、注目される点である。

ところで、法隆寺金堂の細部との比較といえは、雲形肘木についてその異同の有無にすこぶる興味をいだくのであるが、伊東は次のように、鋭く、精細に、観察の眼を及ぼ

している。その全文を引いておきたい。

「雲形肘木」ハ、一種無量ノ趣味ヲ有ス、其「大斗」上ヨリ外部ニ向テ挺出スルヤ水平ニ出テズシテ却テ撓物線狀に上方ニ向テ反轉シ、之ト並行ニ其上ニ挺出セル「肘木」ヲ支承ス、肘木ハ其末端ニ於テ著シク上方ニ反轉シ以テ安全ニ「尾垂木」ヲ支承ス、其姿勢極メテ雄健ナリ、且ツ其挺出ノ方向ハ悉ク壁面ニ直角ヲナス、其四隅ニ於ケルモノハ之ト四十五度ノ角度ヲナシテ對角線上ニ挺出シ、「平」ニ於ケル中間ノ「ニタ備へ」ハ少シク外部ニ向テ扇形ニ開展シ、只其「妻」ノ中間ニ於ケル「一ト備へ」ノミ壁面ニ直角ヲナス、其狀恰モ内部ノ中心ニ一ノ起點アリテ凡テノ「肘木」ハ之レヨリ發光狀ニ逸出スルモノ、如ク、其曲線ノ趣味ニ至リテハ蓋シ筆能ク之ヲ悉ス能ハサルモノアルナリ

ここで伊東が、同じく雲形の肘木とはいえ、その挺出は、大斗より挺出するのの際して、水平ではなく、撓物線を描いて上方に向かつて反転していることを指摘しているのは、肘木自体の雲形の形態とあわせて、伊東の言う曲線の趣味を示すものとして、すこぶる貴重である。もつとも伊東は、肘木の雲形そのものの曲線的形態が、かならずし

も法隆寺式とは同じものとは言い難い点については、残念ながら觀察の眼が及んでいない。

なお、玉虫厨子の場合、すべての雲形肘木の挺出が、壁体に対して直角を示しているわけではなく、外部に向かつて扇狀に開いており、あたかも内部の中心に一つの起点があり、すべての肘木がこれより發光狀に放射しているかのごとき觀を呈しているという点については、すでに塚本靖⁽⁷⁸⁾によつて指摘されている。

そのほか、丸桁および垂木の断面形が、眞正ノ圓形ヲナシ、ている点は、それぞれ法隆寺建築の丸桁および垂木の断面が方形をなしているのに比べて、注意されてよく、また屋根についても瓦の葺き方に「行基葺」が用いられていること、またその勾配が、急峻ニシテ七寸九分ニ達シ、その「反り」が、急激ニシテ四分六厘ニ及フ、という指摘は、屋根の性質をうかがう上できわめて貴重である。なお、鴟尾については、屋蓋ノ兩端ニアリテ秀然相對峙シ其形尤も高逸ナリ、として、その起源、沿革、種類等については、小杉楳村が『國華』第七十八号（明治二九年）に寄せた「法隆寺金堂に置く所玉蟲の厨子」から全文を引用している⁽⁷⁹⁾。

最後に、飾金具とその模様についてである。重要なので、全文を引用しておこう。⁽⁸⁰⁾

厨子ノ壁面ヲ除キテ其他ノ部分ハ悉ク金具ヲ以テ之ヲ鏤ム、往古コノ金具ノ下ニ玉蟲ノ翼ヲ布キシト云フ、之レ玉蟲厨子ノ名ノ依テ来ル所ナリ、金具ハ凡テ銅板ニシテ模様ハ之ヲ彫透シタル者ナリ、模様ハ奔放自在ナル唐草ヨリ成リ、其運用尤モ流暢ニシテ分布宜シキヲ得、實牀ト空間トノ配合尤モ適當ナリ、今其意匠ノ存スル所ヲ討ヌルニ彼ノ東羅馬乃至「アラビヤ」ノ様式ニ類似スル所極メテ多シ、蓋シ之レ玉蟲厨子ノ模様ト東羅馬乃至「アラビヤ」ノ模様トノ間ニ於テ直接ノ關係アルニアラズ。彼レ素ト希臘ノ紋様ニ東洋的趣味ヲ加ヘ漸次ニ變形シテ終ニ一種ノ形式ヲ創メ、我亦希臘及印度ノ紋様ヨリ脱化シ来テ終ニ一種ノ乾坤ヲ拓キシモノ、其相酷肖スルハ即チ兩者其起源ヲ全フシ而シテ其美術的嗜好ノ互ニ相符合スル所アルニ由テナリ、左ニ「アツシリア」希臘、「アラビヤ」、東羅馬及印度ノ模様ヲ掲ケテ關聯スル所ヲ示スベシ(別表ニ參照)

さらに、伊東は、密陀模様についても、次のように述べている。⁽⁸¹⁾

玉蟲厨子ノ裝飾ノ中ニ就テ尤モ奇ニシテ且ツ趣味アルモノヲ密陀模様トス、其須彌座ノ上下ニ施セル蓮花形ノ面上ニハ「ホニーサツクル」(忍冬)ノ變形ヲ印シ、「臺座」ノ平面亦希臘式ノ唐草ヲ畫キ、殊ニ其「尾垂木」ノ挺出スル部分ニ於ケル「通肘木」ノ表面ニ純乎タル希臘式ノ「ホニーサツクル」ヲ見ルニ至リテハ吾人ハ膝ヲ拍テ其東西交通ノ確證ヲ得タルトヲ絶叫セサルベカラサル也

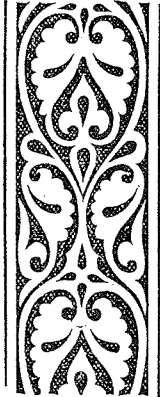
このように、飾金具の文様についても、あるいは彩色文様(色漆画か、密陀画かの考証はしばらくおくとしても)についても、その裝飾文様を、すべての植物文様の系統とみて、その起源を西方に求め、そこに東西交通の確証を得たりとするのは、伊東の古代文様、すなわち、後年に伊東が言う「飛鳥文様」觀の根本とするところである。なお、伊東は、密陀画については、其躰裁ハ世人夙ニ之ヲ熟知シ、其繪画史界ニ於ケル位置ニ至リテハ世間已ニ定説アリ、余ハ今技業ニ亘リテ深く之ヲ説クヲ好マサルナリ、と述べて、言及することを断っている。

こうして、伊東は、玉蟲厨子と法隆寺建築との關係について、次のように述べている。⁽⁸²⁾

様模アビラア



一



二



三

様模馬羅東



一



二

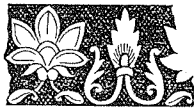


四

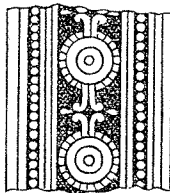


三

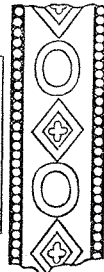
様模度印



一

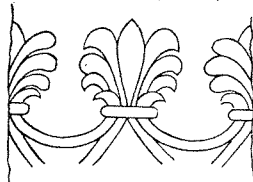


三



二

様模アリシツア



一



二



三

様模臘希



一



二



三

今之ヲ法隆寺金堂以下ノ各字ニ徴スルニ相類似スル點甚タ多シト雖モ亦此ニ備テ彼ニ欠ケ、彼ニ有テ此ニ無キモノアリ、然レ凡今若シ玉蟲厨子ヲ以テ推古式ノ好標本トナストヲ得ハ、此ニ備テ彼ニ欠クルモノハ之ヲ以テ彼ヲ補フトヲ得ルモノナカルベカラズ、「鴟尾」ノ如キハ夫レ或ハ然ラン、而シテ此ニ欠ケテ彼ニ備ハル者人亦タ能ク此ヲ以テ彼ノ誤ヲ訂ス

そして、伊東は、終りに玉蟲厨子の製作者について、左のように断言している。⁽⁸³⁾

之ヲ要スルニ玉蟲厨子ノ製作ハ百濟人ノ手ニ成リシト決シテ疑ヲ納レサル所ナリ、而シテ其毫モ本邦古來ノ藝術カ之ニ關與セサルトモ亦タ太々明ナリトス、想フニ吾人カ玉蟲厨子ニ於テ見ル所ハ純然タル百濟美術ナルモノ、中ニ就テ其ノ裝飾ノ著シク西域乃至希臘ノ趣味ヲ加フルモノト斷定シ得ヘキヤ否ハ即ハチ今日ノ一疑問ニシテ、其百濟美術ナルモノカ如何ニシテ生シ來タルヤヲ講究スルハ此ノ疑問ヲ解釈スヘキ唯一ノ好課題ナリトス
こうして、伊東は、玉蟲厨子の製作者は、百濟人の手に成ったことは決して疑いえない、としているのである。玉蟲厨子をして、夢殿の救世観音像とともに、朝鮮美術の二

大モニユメントであるとして、能うかぎりの賞讃を惜しまなかつたフェノロサのことが、あらためて明治における玉蟲厨子観として想い起されてくるのである。

注

(1) 『官報』第千四百九拾壹号 明治二十一年五月十六日内閣官報局

閣官報局

全文は、前々稿「近代における玉蟲厨子研究の濫觴(上)」(第一一三号・一一四号)一頁に収録。

『読売新聞』明治二十一年五月二十日第二面

全文は、前稿「近代における玉蟲厨子研究の濫觴(中)」(第一一九号)に収録

(中)

(2) 前出『官報』第千四百九拾壹号 明治二十一年六月二十一日

(3) 石井敬吉「日本佛寺建築沿革略」その一(『建築雑誌』第六十一号 明治二十五年一月所収)二十七頁

(4) 石井敬吉「日本佛寺建築沿革略」その七(『建築雑誌』第七十四号明治二十六年二月所収)六八頁

(5) 黒川眞頼「法隆寺建築説」(『國華』第九号 明治二十三年六月)一頁

(6) 宮内省博物館藏版『増補訂正工藝志料』(明治廿一年十

月有隣堂) 五十三頁

(7) 既出「日本佛寺建築沿革略」の『建築雜誌』における連載は、その一(第六一號明治二十五年一月)から、その十一(第九五號明治二十七年一月)に及んでいる。その間に若干の休載号がある。

(8) 伊東忠太演説「法隆寺建築論」の日時に關しては、『建築雜誌』第八十二號明治二十六年十月刊の「本會記事」の欄に、左のとおり掲載されている。

○十月十一日午後六時三十分より京橋區西紺屋町地學協會々館に於て本會通常會を開きたり 名譽會員一名正會員九名贊成會員一名準員七十五名傍聽者八名合計九拾四名なりし

半國に於ける室内裝飾の現況 贊成會員小林義雄君

法隆寺建築論 工學士正員伊東忠太君

右講演午後十後に終りて各自退散せり。

なお、伊東の同講演の内容は、翌十一月の『建築雜誌』第八拾三号に掲載された。

(9) 塚本靖「法隆寺建築裝飾論」(『建築雜誌』第九拾四號明治二十七年十月)

(10) 上原和「近代における玉虫厨子研究の濫觴(上)」(『成城文藝』第一一三號・一一四號)二三頁

(11) 既出、注(8)

(12) 同右。

(13) 毛筆、明治四拾年七月拾七日の日付。現在東京大学に保管。昭和六十二年五月、東京大学工学部建築学科教室にて写しを戴く。鈴木博之助教授の厚意に深謝する。

(14) ペン書、昭和二十一年五月まで。日付なし。現在東京大学保管。

(15) 『伊東忠太建築文獻 論叢・随想・漫筆』(第六卷 龍吟社刊 昭和二十二年一月)六四二頁。

(16) 『建築史』第二卷第一号(建築史研究会昭和十五年一月刊)所収 六七頁。

(17) 稲葉信子「木子清敬の帝國大学(東京帝國大学)における日本建築学授業について」(『日本建築学会計画等論文報告集』第三七四號 昭和六十二年四月所収)一一一頁。

(18) 伊東祐信氏藏「伊東忠太日記(浮世の旅)」(明治二十二年九月より明治二十五年八月まで) 明治二十四年七月二十三日の法隆寺訪問の条。

同日記によれば、伊東は、二十四年七月十日より八月十八日まで、木子清敬講師の引率のもとに、名古屋を振出しに、伊勢、大津、京都、大阪、奈良の諸古社寺歴訪の見学旅行に出かけている。同見学旅行については、稲葉和子氏

の木子清敬研究(注17参照)に詳しい。なお同氏より、『伊東日記』七月二十三日(木)の条の写しを戴いたので法隆寺訪問の箇所のみを左に記しておく。同日記は、横置の中型ノートで、建物や仏像などのスケッチも見られる。稲葉氏の御厚情に感謝する。

二十三日(木)

(前半は大坂滞在の記事)

一時発ノ汽車ニテ湊町ヲ発シ、天王寺、平野、柏原、
亀瀬ノステーションヲ經大和ノ界ニ至レハ、「トン子ル」
アリ 工事未成ナルヲ以テ十町許リ車行セザルベカラズ
王子ノステーションヲ過クレバ次ハ法隆寺ナリ ココニ
テ汽車ヲ下リ腕車ニテ有名ナル法隆寺ヲ見物ス 寺ハ今
ヲ去ル門千百七十年前用明帝ノ御宇聖德太子ノ建立ニ
カ、リ六百年前修築スト云フ 構造極メテ古風ニテ軒ノ
工合ハ今ハ全ク異ナレリ 五重塔ハ本堂ノ傍ニアリ形甚
タ巧ニシテ構造頗ル奇ナリ 今一々之ヲ記セズ 本堂ノ
内ニ入り見レバ柱ニハ「エンタシス」アリ「カピタル」
様ノ斗アリ 頗ル西洋風アリ 即チ知ルコレ印度ノ建築
法ヲ直寫セシモノニテ西洋モ元來印度ヨリ建築ヲ輸入セ
シトヲ 須彌壇ノ繪様モ亦タ希臘、アツシリヤ等ニアル
繪様トヤ、似タリ 殊ニ驚キタルハ百濟國ノ工カ彫刻シ

タル観音ノ像ナリ容イロ貞ト云ヒ体格ト云ヒ日本人トハ全ク
違ヒド一見テモ西洋人ノ風アリ 別図ニ就テ長ケノスル
リト高ク胴ノクビレ居ル加減ヲヨリ見ルベシ ソノ他
一々ヨリ見レバ見ル程面白キト多シ 中々半日一日ニ竭
スベカラザルモ時日ノナキ為メ名殘惜クモコ、ヲ去リ宝
藏ヲ見タリ 宝物中見ルベキモノ甚ダ多シ 実ハ一々寫
生シタキ位ナリ ソノ中殊ニ面白カリシハ聖德太子ノ御
幡ノ模様ナリ 別図ニ示スガ如ク甚シク「アツシリヤ」
国太古ノ模様ニ似タリ 蓋シ「アツシリア」モ「日本」
モ「百濟」モ「支那」モ皆ナ印度ヨリ美術ヲ輸入セシト
ヲ推考スベキナリ

別ニ聖德太子ノ夢殿アリ 太子コノ中ニ籠こもラレシ處ニシ
テ八角堂ナリ 木子氏ハ頼リニソノ建築ノ巧妙ヲ稱賛サ
レタリ 又豊明殿ハ太子ヲ祭ル太子自作ノ自身ノ像アリ
中々上手ナリ 其他ノ小ナル建築物甚タ多シ 一々之ヲ
見ルノ違ナキヲ以テ五時再ヒステーションヨリ汽車ニテ
郡山ヲ經六時奈良へ着同町ノ角屋へ一泊ス(以下略)

(19)

(20)

前出 二九頁。

第一期 聖德太子ノ時代以前

第二期 聖德太子ノ時代

- 第三期 天武天皇ノ時代
 第四期 聖武天皇ノ時代
 第五期 桓武天皇ノ時代
 第六期 藤原氏ノ時代
 第七期 源氏及北條氏ノ時代
 第八期 足利氏ノ時代
 第九期 織田氏及豊臣氏ノ時代
 第十期 徳川氏ノ時代
- (21) 既出「日本佛寺建築沿革略」その七 六八頁。
 (22) 前出 七十一頁。
- (23) 既出 演説「法隆寺建築論」三一八頁。
 (24) 東京国立博物館所蔵。既出本稿その一 一九頁。
 (25) 既出「法隆寺研究の動機」六八頁。
 なお、辰野金吾については、白鳥省吾「工学博士辰野金吾傳」(辰野葛西事務所 大正十五年十二月)がある。
- (26) 前出「法隆寺研究の動機」六八頁。
 ほかに岸田日出刀「建築学者 伊東忠太」(乾元社 昭和二十年六月)がある。
- (27) 既出「木子清敬の帝國大學(東京帝國大學)における日本建築学授業について」一一一頁。
 本建築学授業について」六九頁。
- (28) 既出「法隆寺研究の動機」六九頁。
- (29) 前出 六九頁。
 (30) 前出 七〇頁。
 (31) 既出「法隆寺建築論」三三〇頁。
 (32) James Fergusson, Indian and eastern architecture, London 1876.
 (33) 既出「法隆寺研究の動機」七〇頁。
 なお、東京美術学校出講については、自筆履歴書に、次のように記されている。
 明治廿六年二月四日建築裝飾術ノ授業ヲ囑托ス 東京美術学校
- (34) 黒川眞道「文學博士黒川眞頼傳」(大正八年五月 非売品)年譜に次のように記されている。
 明治二十二年一月二十五日東京美術学校教諭に任ぜられる。
 (る)
- 同二十三年十月十五日東京美術学校教授に任ぜられる。
 (35) 既出「法隆寺建築論」三一九頁。
 (36) 森田思軒「奈良の古美術」(「郵便報新聞」明治二十一年六月廿二日)。
 森田は、明治二十一年の六月八日に始つた法隆寺美術取調の報告を、岡倉覺三の教示を仰ぎながら、法隆寺美術についての報告を書いているが、そのなかで、推古朝の美術

のタイプを、法隆寺式、印度式、曇徴式に分けている。詳しくは、前号(第一一九号)の本稿その二「明治の美学者・美術史家による玉虫厨子の研究」四一六頁および別表一を参照。

- (37) 既出「法隆寺建築論」三二二頁。
- (38) 鳥居武平「法隆寺伽藍諸堂巡拜記」(発行者辻本朔次郎 明治二十八年五月)、緒言の日付は明治廿六年十一月。なお、巻末所収の塚本武馬「天智天皇の朝に法隆寺に災すと云の辨」の日付も明治廿六年十一月。
- (39) 昭和六十年二月十七日調査。法隆寺住職千早定朝はじめ信徒惣代三名、法隆寺村長の連名で、奈良縣知事小牧昌業宛に提出されている。
- (40) 奈良県立図書館郷土資料室蔵。昭和六十二年五月二十九日調査。
- (41) 奈良県立図書館郷土資料室蔵。昭和六十年二月十七日調査。
- (42) 既出「法隆寺建築論」三二二頁。
- (43) 同 三二九頁。
- (44) 同 三二九頁。
- (45) 同 三四二頁。
- (46) 『建築雑誌』第五一輯六三二号(昭和二十二年一〇月)二頁。
- (47) 東京大学工学部建築学科教室より提供された資料による。
- (48) 既出「法隆寺建築裝飾論」二八〇頁。
- (49) 同 二八一頁。
- (50) 同 二八〇頁。
- (51) 既出「日本仏寺建築沿革略」その三(『建築雑誌』第六三号)六九頁。
- (52) 東京大学工学部建築学科図書室蔵
- (53) 既出「法隆寺建築裝飾論」二八一頁。
- (54) 同、二八六頁。
- (55) 小杉楹郎「美術と歴史との関係」(『皇典講究所講演』五明治三二年四月)一四頁。
- (56) 小杉楹郎「法隆寺金堂の玉虫の厨子」五号(『東洋美術』明治二十四年九月)一〇頁。
- (57) 石井敬吉「日本佛寺建築沿革略」その七(『建築雑誌』第七四号 明治二六年二月)六九頁。
- (58) 既出「法隆寺建築裝飾論」二八七頁。
- (59) 同 二八七頁。
- (60) 同 二八八頁。
- (61) 伊藤忠太「法隆寺建築論」(『東京帝國大學紀要』工科第

一冊第一號 明治三十一年四月『紀要』と略す。

八〇頁。

(62) 同 九三頁。

(80) 既出『紀要』一〇二頁。

(63) 同 一一七頁。

(81) 同 一〇四頁。

(64) 既出「法隆寺建築裝飾論」二八五頁。

(82) 同 一〇四頁。

(65) 既出『紀要』一一八頁。

(83) 同 一〇五頁。

(66) 同 一一九頁。

(67) 同 一二〇頁。

(68) 同 一二二頁。

(69) 同 一二二—一二五頁。

(70) 同 一二六頁。

(71) 同 一三〇頁。

(72) 同 一二八頁。

(73) 同 九四頁。

(74) 既出 演説「法隆寺建築論」三四二頁。

(75) 上原和「近代における玉虫廚子の研究の濫觴」(上)

——その一 明治初期の國學者による玉虫廚子の研究」

『成城文藝』第一一三、一一四号) 一四頁。

(76) 既出『紀要』九六頁。

(77) 同 九六頁。

(78) 既出「法隆寺建築裝飾論」二八七頁。

(79) 既出「法隆寺金堂に置く所玉虫の廚子」五七七頁——五

(本論文及び前号所収の同題目論文は、昭和六十一年度
成城大学特別助成による研究成果の一部である。)